
偽典・女神転生 セ?口のテ?ヒ?ルサマナー

まほうつかい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽典・女神転生 セ？口のテ？ヒ？ルサマナー

【Nコード】

N8128Z

【作者名】

まほうつかい

【あらすじ】

それはありふれた少年と少女の出会いだった。一つだけ違ったのは少年がある運命に選ばれていたことだけ。小さな蝶の羽撃きが、誰も知らない運命の激動を巻き起こす！

01 序章 HERO side (前書き)

某月某日、作者の家にて交わされた会話

作者母：こんなの見つけたけれど、あんたのじゃない？

作者：え？……うげっ！？（あれは地震で無くしたと思っていたUSB！）

作者母：あ、やっぱそうなのね？ 何か変なTXTが入っていたから……

作者：（恐る恐る）み……見た？

作者母：（何故か満面の笑みで）うん、見た。

作者：くぁwぜdrftgyぶじこ1p（錯乱）！

……このような悲劇の末に発掘された古い未完成SS（もちろん未公開）ですが、ご笑納いただければ幸いです。

なお、本作は原作五〜六巻の頃に書かれたため、話の各所に矛盾がある可能性があります。また本作は<http://ncode.syosetu.com/n2033n/>が停滞している間のつなぎとして投稿されました。そのため更新は亀よりも遅くなる可能性があります。

これらのことに同意いただけた方だけお読みください。

01 序章 HERO side

その日、彼は不幸だった。

予兆は前日の夜、インターネットの海を渡り歩いている内に『DS - NET』なるページにたどり着いた事から始まっていた。

「何だこれ？ 新手的出会い系サイトか？」

トップページに表示されているのは名前を記入するボックスと送信ボタンのみ。

飾りも何もないシンプルかつ意味不明なページに彼は首を捻った。捻ったが…、元々彼はあまり物事を深く考えない質である。

さらに言えば人一倍好奇心が強く、物事にすぐ首を突っ込むタイプでもある。

だから彼はその好奇心の赴くまま、深く考える事なく自分の名前を打ち込む。

「平賀：才人、つと」

それが自分の運命を大きく変えてしまうモノとも知らずに。

送信ボタンをクリックした瞬間、ノートパソコンが不快なエラー音をがなり始める。

「うわっ！」

突然の出来事にオロオロしてるうちにエラー音がピタリと治まり、画面が暗転する。

カーソルが2、3回明滅したかと思えば、凄まじい勢いで文字列が表示されて行く。それは何が起こっているのか理解出来ず、惚けていた才人が我に返る直前に終わった。

数字とアルファベットで構成された、何語だかすら判別出来ない奇妙な文字列。

かろうじて才人が読めたのは最後の一行だけであつた。

『願わくばこのプログラムが正しき願いの為に使われん事を。 f r
o m : S T E V E N 』

その後、マウスもキーボードも反応しなくなったノートパソコンを強制終了させ、才人は不貞寝を決めこんだ。

そして今朝、起動はするものの一切の操作を受け付けないノートパソコンの修理に出向いた店で才人に告げられた言葉は

「これは駄目ですね」

無慈悲な死亡宣告だつた。

「なんでだよ！ まだ保証期間中だろ！？」

「いえ、お話を伺う限りではそのホームページにアクセスしたのが原因ぽいじゃないですか」

応対に出た店員は口調こそ丁寧だが、微妙に尊大で苛つかせる態度で才人に接客する。

「そういう場合は保証外になっちゃいますよ。規約に書いてあったでしょう?」

才人が使っていたパソコンは数世代前の、頑丈なのが取り柄の型落ち機だ。

売れ残った問題児を売り切りたい店側の意図で、普通なら保証の範囲内に入る筈の『ウィルス感染』等を外すなどをして大幅な値引きを実現していた物だった。

「詐欺じゃねーか!」

「いいえ。ちゃんと規約は提示してますから、確認してないお客さんが不注意なんスよ」

険悪を通り越して最悪になりつつあった二人の態度を一変させたのは、いつまでも続く才人のクレームに業を煮やした上司の登場であつた。

「お客さん、困りますよ。お買い上げのときにきちんと確認しなかったのが悪いんじゃないんですか」

慇懃な言葉遣いとは裏腹に、そこらのヤクザも一歩引くであろう強面と頑強な体を持った上司の登場に、さすがに才人も口をつぐむ。

「とにかく、当店では修理も返品も効きませんのでお引き取りください!」

「ちよつ、待てよ! それはいくら何でも……」

「お引き取りください!」

「……分かりました」

店員とのガン付けに負けた才人が店を離れる。振り返ると店員が塩を撒いているのが見えた。

さらに不幸は続く。

不貞腐れながら歩いていれば、怖いお兄さん方に絡まれてダッシュで逃げ出したり。

ポケットに手をつ込めば、穴が開いていて財布の感触がなかったり。

慌てて交番に駆け込んでみれば、なぜかひったくりの犯人だと誤解されたり。

落とし物の届け出を出し、迎えを頼もうと携帯を出せば電池切れだったり。

たつぷり10駅分を歩いて帰れば既に日が暮れていたたり。

「き、今日はとことんツイてねえや……。とつと寝ちまおう、それが一番だ……」

さんざん歩いたせいで疲労困憊な才人が喘ぎながら家路に付く。もうこれ以上の不幸など起こってくれるなと願いながら。

だが、今日の彼は徹底的に幸運の女神に嫌われていたらしい。なぜなら、本日最高の不幸はまさにその瞬間に訪れたのだから。

才人の足が止まる。突然目の前に現れた『あり得ない物』を見て。

「な、何だこりゃ？」

目を見開く才人の前に現れたもの、それは『鏡』だった。

高さは2メートル、幅は1メートル程だろうか、ぼんやりと光る『鏡』。よく見ると地面から少し浮いているようだ。

普段の才人なら好奇心の赴くままに手を出したろうが、今の才人は猜疑心の塊である。

「冗談じゃねえ！　なんだか知らねえがこれ以上変な事に巻き込まれてたまるか！」

『鏡』の脇をすり抜ける様に避ける才人。当然『鏡』の事などガシラ無視で、だ。

それが災いした。避けるなら大きく迂回すれば良いものを、『脇をすり抜ける』様に避けてしまった事が。

「うあつ！？」

引っ掛かったのだ、ノートパソコンを入れていたデイバックが『鏡』の端に。

デイバックはそのまま『鏡』の中へ、それを持っていた才人も一緒に『鏡』の中へ。

そして襲いかかってきた激しい衝撃。

感電にも似たそれに急速にぼやけて行く意識の中、才人は

「……ガッデム！　そんなに俺が嫌いか、神様！　畜生、覚えてやがれ、いつかぶん殴ってやるからな！！！」

信じてもない神様への罵倒を並べていたのであった。

02 序章 HEROINE side

その日、彼女は不幸だった。

あらゆるケチの付き始めはやはり生まれた家にあつたのではないだろうか。

ハルケギニアでも有数の伝統と格式を持つトリステイン王国の、さらに数える程しかない大貴族、ラ・ヴァリエール公爵家の三女母はあの『烈風』カリィヌ・デジレ。父もまた公爵家に相応しい実力と風格を備え、さらには二人の姉も聡明で実力も申し分なし。ここまで揃って居るのならば、彼女にも尋常じゃない期待がかかるというものだ。

だが彼女が成長するにつれ、その期待は失望に変わる。

彼女は魔法が使えなかったのだ。

『フライ』を唱えても爆発。『レビテーション』を唱えても爆発。果ては『ロツク』でも爆発という有様。とにかくどんな魔法でも爆発させてしまうのだ。

なまじ期待が大きかった事が彼女の不幸を加速させる。

両親は魔法の使えない娘を厳しく、それはもうトラウマになるほど厳しく躾けた。

もちろん魔法が使えるよう努力しなかった訳ではない。むしろ座学なら両親や姉にも負けぬ程勉強していた。

実技だって努力を重ねた。練習用の杖はいくつ使い潰したか分からない。夜通し発音を練習し、酸欠で倒れた事だってある。

両親と二人の姉に見送られ、トリステイン魔法学院の門を潜った日に誓った決心は今でも忘れていない。

『ヴァリエールに、貴族に相応しいメイジになってみせる！』
そしてその誓いを叶えるべく一年間頑張った。周りの目が家柄に

対する羨望から侮蔑へ、さらに嘲笑へ変化しても頑張った。

悔しさに涙を滲ませ、それでも泣き声が漏れないよう枕に顔を押し付けて咽び泣き、朝には何でもない様に振るまいながら頑張った。なのに使えない。どんなに頑張っても、どんなに努力しても魔法が使えない。

それでも大貴族としての誇りと責任感が彼女に『逃げる』という選択肢を選ばせなかったのが更なる不幸であった。

そして魔法が使えないまま迎えた春の使い魔召喚の儀式。

何十回も繰り返し確認してもうすっかり暗記してしまったルーンを唱え、杖を振る。

爆発。

もう一度杖を振る。爆発。

爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。

周りの生徒達から罵声と嘲笑、僅かな憐憫を浴び、それでも諦めず杖を振る。

この事態を予見し、彼女を一番最後に残した監督のkolbell教諭から儀式の中止を告げられるまで、彼女は杖を振り続けた。

「ミス・ヴァリエール。残念ですが……」

「もう一度！ もう一度だけお願いします！ 本当にこれで最後にしますから！」

必死の懇願で得た文字通りのラストチャンス。

渾身の力を振り絞り、血の気が失せる程握りしめた杖を振る。

「始祖ブリミルよ、幻獣なんて贅沢は言いません！ この際犬でも猫でも鼠でもいいから出てきて！」

爆発。そして爆煙が晴れたそこに浮かぶ銀色の円。

「……せ、成功した！ やった！ 成功したんだ！」

人生初めての魔法の成功。必死の祈りは確かにブリミルに届いたのだ。

しかし出てきたのは祈りの内容とはかけ離れていた。

まず奇妙な鞆が出てきた。四角くて平べったいが厚みはある。何で出来ているのか、光沢のある布の様な質感。

「……え？」

鞆の取っ手にくっついていたのは人間の腕。これまた奇妙な材質の服に包まれている。

「……え、え？」

腕の先にあったのは少年の顔。

おそらく同年代であろうその顔にはくつきりと苦悶の表情が浮かんでいる。

「……え、え、え？」

目の前に現れた物体を信じられず、彼女は目を擦ってもう一度確認する。

そこにいたのはまぎれもなく人間だった。

「うええっ!？」

思わず奇声を上げたのも無理はない。

『サモンサーヴァント』で人間が出てくるなぞ前代未聞だからだ。

「ミミミミスタ・コルベール!!! に、に、人間が、男の子が!」
「落ち着きたまえミス・ヴァリエール! たとえ人間でも成功には
変わらないですよ!」

「ででもこんなこと前代未聞です! 召喚のやり直しをさせて下さい!」

再びの懇願。たしかに前例のない事態であつたし、人間を使い魔にするなど普段のコルベールなら絶対認めないだろう。

しかし長時間に渡って繰り返し返された召喚失敗に焦っていた彼はその懇願を拒絶してしまった。ある意味、これも不幸と言える。

「ダメだ! 伝統に則つたこの儀式に例外はない。平民でも何でも呼び出した以上は彼と契約しなくてはいけないんだ」

「そおんなあ……………」

無慈悲なコルベールの一言が最後の希望を打ち砕く。

落ち込む彼女に更なる不幸の追い打ちが告げられた。

「さあ、早く彼と『コントラクト・サーヴァント』をしたまえ」
「……………はい?」

思わず固まってしまう。

たしかに春の使い魔召喚の儀式は『サモンサーヴァント』で呼び出した生き物に『コントラクト・サーヴァント』を行う事で成立す

るものだ。

だが問題は……

（こここ『コントラクト・サーヴァント』って、コイツと、キキキキス、するって事お！）

……契約の方法がマウス・トゥ・マウスのキスである事、だった。いかに魔法が使えないとはいえ大貴族の子女、筋金入りの箱入娘である彼女にそんな経験はない。当然、これがファーストキスになる。

（ぐ、婚約者のワルド子爵にだってしたことないのに、なんでこんな平民なんかにキスなんてしなきゃいけないのよお！）

ともあれ、コルベールと級友達の『さっさと済ませろ』というプレッシャーは高まるばかり。天を仰ぎ、ため息を一つ吐き、意識を切り替える。

（これは儀式、これはノーカン、これはファーストキスじゃない……、よし！）

肚は決まった。キスに挑む乙女というよりは闘いに望む戦士の様な面持ちで、未だ意識を取り戻さない少年の顔を正面に向けさせる。

「感謝しなさいよ、貴族にこんな事されるなんて、普通は一生無いんだからね！」

そして彼女は呪文を紡ぐ。波乱に満ちた人生を決定付ける、契約の言葉を。

「我が名は『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァ

リエール』。

五つの力司るペンタゴン。この者に祝福を与え、
私の使い魔とな
せ！」

03 不本意な召喚と深紅の隣人

唇に何かが触れている。その感触に平賀才人は目を覚ます。最初に見えたのは目を閉じた見覚えの無い少女の顔。

近い。非常に近い。

どれだけ近いのかと云うと、鼻先が触れる程には近い。

そして唇から伝わる柔らかい感触。

紛う事無き『キス』であった。

突然の事に硬直する彼を差し置き、少女が唇を離して閉じていた目を開く。

鳶色の瞳が桃色の髪に映える、文句の付け様が無い完璧な美少女であった。

……才人を仇を見る目で睨みつけていなければだが。

謎の美少女は白いブラウス、グレーのプリーツスカートと太腿までかかるハイソックスと云う、学校の制服に見えなくもない服装をしている。黒いマントが余計だが。

周りを見回そうとして、彼は初めて自分が横たわっているのに気付いた。

どうやら草原に仰向けになっていたらしい。東京では見られない豊かな草原が広がり、遠くにはヨーロッパ辺りにありそうな石造りの城が見える。

そして才人と少女を取り囲む様に人垣が出来ていた。

才人と同年代に見える少年少女の群れ。外国人らしき彼等は全員黒いマントを羽織り、手には何やら棒の様なものを持っている。

どれを取っても才人には見覚えの無いものばかりだった。少なくとも先程まで自分が歩いていた道にはこんな光景は存在しない。

（なら、此処は何処だ？ 俺は何で此処にいるんだ？
……いや、それよりもあの女の子は何者だ！？）

あり得ない景色と見知らぬ少女に唇を奪われた衝撃で混乱する才人を他所に、少女は背後に立っていた中年男性に向かって声をかける。

「ミスタ・コルベール。終わりました」

「よく出来ましたミス・ヴァリエール。『サモン・サーヴァント』と違って『コントラクト・サーヴァント』は一回で成功した様だね」

眩い頭の中年男性が少女を労う様に応える。大きな木の杖と真っ黒なローブを纏ったその姿は、まるでお伽噺に出てくる魔法使いそのものだ。

「相手が只の平民だったから、ルイズにも契約出来たんだぜ、きつと！」

「高位の幻獣だったら、ルイズの奴絶対失敗してたぜ！ 何せ『ゼ口』だからな！」

人垣の方から嘲笑う様な声が上がった。

それはたちまち全員に広がって行き、似た様な罵声があちこちから聞こえ始める。

頭髮の薄い男性が諫めようとするが、次第に声は大きく高くなり、ルイズと呼ばれた少女が顔を怒りで真っ赤に染めて何やら言い返している。

才人は段々と腹が立って来た。

状況はさっぱり解らないままではあるが、この少女が何やら不当な糾弾を受けているらしい事は明白。集団で弱いもの苛めをするなど才人にとって言語道断、被害者が美少女であるなら尚更だ。

ならばこんな所で寝てる場合ではない。足に力を込めて立ち上がり、コスプレ集団に向けて足音高く歩み寄る。

「おい、お前ら！ いい加減に……ぐっ！

ぐああああああああああああああッ！！??」

そして怒鳴り付けようと口を開けた瞬間、才人の身体が異様に熱くなった。全身が灼ける様に熱い。たまらずその場に蹲った。

「何だこれ！？ 熱い、手前ら俺の身体に何しやがった!？」

突然苦しみ始めた才人を一瞥して、ルイズは彼に起こっている事態を理解したらしい。

苛立たし気に才人に告げる。

「貴族に対して何よ、その口の利き方は！ 『使い魔のルーン』が刻まれてるだけだから、すぐに終わるわよ。おとなしく待ってなさい」

「何だそりゃ！？ 冗談じゃねえ、勝手にそんなもん刻むな！ くそっ、今日はツイてなさ過ぎんぞ、畜生!……っ、終わった、のか？」

才人が喚んでいる間に熱さは収まったらしい。平静を取り戻した身体を確認する様に見回すと、左手の甲に何やら文字の様なものが浮かんでいるのが見えた。

「ふむ、珍しいルーンだな」

いつの間にか近づいて来た中年コスプレマントがそれを見て呟く。
そしてきびすを返し、

「さあ皆、教室へ帰るぞ」

そう言っ て宙に浮いた。

「……ふへ？」

呆氣に取られ、奇声を漏らす才人。見れば他の少年少女達も次々と浮かび、遠くに見える城を目指して飛んで行く。

自分の常識を超えたあり得ない光景に、遂に才人は考える事を止めた。

あっという間に全員飛び去り、その場に残ったのは才人とルイズの二人のみ。

周囲に誰も居なくなるや深く溜息を吐くルイズ。そして才人を振り返って一言。

「それで、あんた誰？」

同じく溜息を吐いた才人が応える。

「俺は平賀才人。んで、アンタは？」

「さっきも言っ たけど貴族にそんな口利いて良いと思ってるの？」

私はルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン魔法学院の二年生よ」

才人の話し方が癪に障ったのか、顔を顰めながらも律儀に自己紹介するルイズ。

「魔法学院？ いや、それよりも何だ貴族って。

此処はフランスか？ それともイギリスか？」

「フランス？ イギリス？」

……貴族すら知らないって、アンタ何処の田舎から来たのよ？」

どう見ても日本人じゃないルイズと東京ではない光景、そして先程から言葉の端々に上る『貴族』なるもの。

才人が『貴族』と言われて思いつくのは中世ヨーロッパの貴族である。

無論そんなものは民主主義と資本主義が席卷する現代地球において既に絶滅危惧種だ。

にも拘らず目の前の少女は臆面無く自然に『貴族』と口にする。しかもあからさまに欧州系の白人種でありながら、フランスもイギリスも知らないと来た。

（OK OK、こんな田舎臭い場所だし、フランスとか知らないのは多分鎖国してる国からかも知れないな。だったら貴族が居てもおかしく無いだろ）

物凄く無理のある強引な解釈で、無理矢理自分を納得させようとしてる才人。

普通こんな状況に陥ったならパニックの一つも起こす所だが、皮肉にも不幸続きの一日が彼に冷静さを与えていた。只の現実逃避かもしれないが。

心の奥底から沸き上がる嫌な予感から必死に目を逸らしながら、彼はたった一つだけ曲解出来なかった事実を確認する。

「で、何であの人達は空を飛べるんだ？」

何かを押し殺しながら放たれた問いに、ルイズは訝し気に思いながら返答する。

「そりゃ飛ぶわよ。メイジなんだから飛べるに決まってるでしょ？」

何を今更、と言った風に應える彼女に、才人は予感的中したのを知った。

天を仰いで再び溜息一つ。そして彼はルイズを正面から見据えて頼み込む。

「ルイズ、だったか？ 済まんが、俺を思いつきり殴ってくれ」
「呼び捨てにしないで！ ……って、何それ？」

いきなり不可解な事を言う才人に目を丸くするルイズ。

「ああ、これは悪い夢なんだ、きっと。

今日の晩飯は母さん特製のハンバーグだから、そろそろ目を覚まさなきゃ冷めちゃう。

だから思いつきり俺の頬をグーで殴ってくれ。

頼むから俺をこの悪夢から覚めさせてくれ」

何やらイイ笑顔で頼み込んでくる才人の姿に一瞬呆気を取られたルイズだったが、彼の言葉が脳裏に染み込んでくるにつれてその表情が段々険しくなってくる。

「解ったわ、殴れば良いのね？」

そう言ってルイズは拳を握り締める。

「……ねえ、私からも良いかしら？」

「……何だ？」

「何でアンタが召喚されたの？」

「知らん」

「何で由緒正しいヴァリエール家の三女である私が、アンタみたいな平民を使い魔にしなければいけないのかしら？」

「解らん」

「何で使い魔の契約方法がキスだったのよ？」

「知らねえよ。早くしてくれ、俺はさっさと起きたいんだ」

ルイズは拳を大きく振りかぶった。

「私のファーストキスを、返せえええええええええええええええ！！」

腰の入った良いパンチだった。

薄れ行く意識の中で、才人は（それは俺の台詞だ！）と声に出せず
に呟いた。

*
*
*

氣絶から覚めても、才人の悪夢は絶賛継続中だった。

ここはルイズの部屋である。高価そうな調度品に囲まれた十二畳程の洋室で、二人はテーブルを挟んで向かい合つて互いの事情を交換していた。

「それ本当？メイジも貴族も居ない国なんて、聞いた事無いわ」

「日本で魔法使いなんて言い出したら変人扱いだっつーの。そもそも月が二つ有る時点で地球じゃねえよ」

疑わしげに才人を睨むルイズと、殴られた頬をさすりながらぶつ

きらばうに返す才人。

時刻は既に夜。窓から望む星空に浮かぶのは、地球のその二倍は有る大きな月。

それが二つ。

「異世界、つか。ラノベじゃ有るまいし、しかも剣と魔法のファンタジーですか。

在り来たり過ぎて涙も出ねえや。しかも帰れない所までお約束と来たもんだ。

不幸にも程が有るだろうよ神様。参ったねこりや」

「何ぶつぶつ言ってるのよ。文句が有るのはこっちも同じだわ。感覚の共有は不可能、秘薬は存在すら知らない、主人を護るうにも弱っちくて話にならない。

正直大ハズレも良い所よ。ああ始祖ブリミル、なんでこんな奴を私の元に寄越したんですか？ 死ぬまで一生恨みますよ」

互いに自らの境遇を嘆き、神への不満を打ち撒ける二人。

やがてそれにも飽きたのか、ルイズが才人のデイバッグに興味を示す。

「ねえ、それに何が入ってるの？ 結構大きいけれど……」

水を向けられた才人もとりあえず、問題を先送りする事にしたらしい。

デイバッグを開けてノートパソコンを取り出す。

「何それ？」

「パソコンだよ。壊れてるけどな。他には何も入ってない……何だこのケーブル？」

パソコンの下敷きになって隠れていたらしい、三十センチ程のケーブルを掴み出す。

それは片方がUSBコネクタになっており、もう片方は薄くて平べったい形状をしたソケットに見える。例えるなら携帯の充電ケーブルの様な……

「って携帯の充電ケーブルじゃねえか！」

思わずノリツツコミを入れる才人の大声に、耳を押さえたルイズが負けじと大声で怒鳴り付ける。

「煩いわね！ その紐が何だって言うのよ！？」

才人はルイズの疑問を無視してパソコンを起動させ、ポケットに入っていた電池切れの携帯に繋いで電源を入れる。

普段はコンセントから直接充電器に繋いでいる為、パソコンと接続するケーブルの出番は無い。どうやら使わないまま鞆に突っ込んでおいたきり忘れていたようだ。

召喚される前に見つけていれば、あるいはハルケギニアに来なくて済んだのかもしれないと思うと、何ともやりきれない。

才人が自身に降り掛かった不幸の連続に改めて落ち込んでいると、暗かった携帯の画面に光が灯り、充電中のマークが表示される。

それを確認すると、才人はルイズに携帯を向けた。

小さな音が鳴り、画面に不機嫌なルイズの顔が映る。

「コイツはな、携帯電話って言うんだ。魔法じゃなくて科学で造られた機械の一種で、これと同じ機械があればどんなに遠くに居ても会話が出来るんだよ。」

最近の奴にはカメラって風景を記録する機械が入っているから、撮影した画像をメールで送り取り出来るしな。他にも時計や計算機

とか、色々な機能が有る。

これには入れてないけれど、簡単なゲームとかも入れられるんだぜ。日本じゃ殆どの人が持つてる機械なんだ」

そう言いながら先程撮影したルイズの写真を見せる才人。

携帯の小さな画面に自分の顔が映っているのを見たルイズが驚きの声を上げる。

「凄い、こんなマジックアイテム見た事が無いわ！

何の系統で動いてるのかしら、風？ 水？」

「だから科学だって。魔法じゃない。

これで解っただろ？ 俺はこの世界の人間じゃないんだ。だから魔法とか使い魔とか言われても解んないんだよ」

確かにこんなアイテムは見た事も聞いた事も無い。

だからといって『異世界から来ました』等という戯言を受け入れられる筈も無い。

まあメイジも居ない国から来た、というのは本当らしいからそこから辺は少しずつ教えてやれば良いだろう。具体的には貴族に対する礼儀とか。

いずれにしても今日は疲れた。使い魔の躰は明日から始めるとして、今日はもう寝てしまおう。そう判断したルイズは才人にも出来そうな仕事を与える事にした。

「まあいいわ。今日はもうお終いにしましょう。

とりあえず明日の朝起こして頂戴、それくらい出来るでしょう？」

「起こせば良いのか？ 何時頃？」

「何時って、解るの？」

「ああ、さっきも言ったろ？ この携帯は時計にもなるって。

目覚まし機能も付いているから、時間になったら起こしてくれる

ぞ」

才人の説明に（随分便利ね、後で取り上げようかしら？）等と外道な事を思いつつ、ブラウスのボタンを外して行く。ネグリジエに着替える為だ。

突然脱ぎ始めたルイズに才人が硬直する。ブラウスを脱ぎ、キャミソールの裾に手を掛けた所で才人の脳が再起動を果たした。

「な、何やってんだよ！ 男の前で着替えるなんて、何考えてんだ！ お前もしかして痴女か！？ 俺の貞操大ピンチ！？ むしろウエルカム！！」

ほんのりと願望を漏らしながら、真っ赤になって慌てふためく才人とは対照的に、ルイズは冷静な態度を崩さない。

「何言ってるのよ、使い魔に見られても何ともないわ。それより、これ明日になったら洗濯しといて」

その言葉と同時に才人に何かが飛んでくる。

反射的に受け止めたそれを見て彼は再び硬直した。

それは先程までルイズが身に付けていた下着であった。レースが付いた高級そうなそれはまだ生暖かく、脱ぎたてである事を主張していた。

「お、おい！ 何で俺がお前の下着を洗わなきゃなんないんだ！？ 嬉しいけど！ いや嫌なんだが！」

才人の本音が混じって訳が解らない抗議に、寝台に潜り込みかけたルイズがうんざりした様に返す。

「アンタが帰れない以上、アンタの面倒を見るのは私なの。それくらい当然でしょう？」

掃除、洗濯、その他諸々やってもらうからね」

そう言われては才人として強く出る事は出来ない。

何度目か解らない溜息の後、彼は重要な事をまだ聞いていないことを思い出した。

「なあ、俺何処で寝れば良いんだ？」

「そこら辺で寝れば良いでしょ。」

ベッドは一つしか無いし、毛布くらいは恵んであげるわ。感謝なさい」

そう言つて毛布を一枚だけ投げて寄越すルイズに、（こりや何言つても無駄だな）と早々に諦めて才人は毛布に包まった。

ルイズが指を弾き、照明が消える。夜の闇に満たされた室内に、二つの月明かりが差し込んでくる。こうしてハルケギニアの夜は更けて行った。

才人は結局気付けなかった。

『動かない筈のパソコンが起動した』事に。

草木も眠る深夜、二つの寝息が満ちる部屋に突如電子音が響く。
電源を落とされた筈のパソコンが勝手に起動して、画面にウィンドウが次々とポップアップする。画面中央に大きなダイアログが表示され、それと同時に繋がれっ放しだった携帯のLEDライトが点滅を始めた。

ウィンドウの中でゆっくりとバーが動き、100%になった所で今度は次々とウィンドウが閉じて行く。

『DDS - Program install OK . 新たなる戦士の誕生を願って』

暗い画面に短い文章が数回点滅したかと思うと、始まりと同じく唐突に電源が落ちる。

そして部屋には再び二つの寝息が静かに満ちて行った。

異世界であろうが何であろうが、朝日は万人を等しく照らす。

携帯ががり立てるアラーム音で目を覚ました才人は、音を止めずにそのままルイズの枕元に放り投げる。

固い床で寝ていた所為で身体の節々が痛かった。柔らかそうな寝台の上で可愛らしく寝息を立てている元凶に、つい悪戯心が動いても仕方が無い。

「きゃあッ! ? 何、何が起きたの! ?」

跳ね起きるルイズの姿に（してやったり！）と内心ニヤ付きながら、才人は使い魔として最初の仕事を果たした。

「何って、お前が言ったんじゃねえか。『起こしてくれ』って。忘れたのか？」

未だ現状を把握していないルイズに苦笑しながら、才人は指摘した。その声でやっと彼の存在に気が付いたらしく、彼女は寝ぼけ眼を全開にして怒鳴り付ける。

「だ、誰よアンタ！……って、昨日召喚したんだっけ」

「はいはい、貴族様の召喚にうつかり引つ掛かった所為で帰れなくなった平民でございますよっと。目え覚めたんなら携帯返してくれ、電池がもつたいない」

忘れてたのかよ、とあきれ顔で才人はアラームを鳴らし続ける携帯に手を伸ばす。

ここで彼の名誉の為に弁明しよう。

才人は確かにお調子者で、特に女の子に対してだらしない部分があるものの、この時の彼には下心など一切無い。彼は本当に携帯を取り返そうとしただけなのだ。

しかし先程ルイズの枕元に投げ込まれた携帯は、身を起こした拍子に滑り落ちて、丁度太腿の付け根辺りにあった訳で。

「朝っぱらから何すんのよ！ この変態！」

ルイズのコークスクリューが才人の頬を奇麗に抉った。

顔を真っ赤に染めたルイズと頬を真っ赤に腫らした才人が連れ立って部屋を出ると、隣の扉から真っ赤な髪的女性が現れた。

ルイズより背が高く、才人と同じくらいの身長だ。健康的な褐色の肌と零れ落ちそうな大きな胸が彫りの深い美貌と相俟って何とも艶かしい。

「あら、お早うルイズ。朝から随分賑やかだったわね？」

ニヤリと唇を歪めて挨拶してくる彼女に、顔を顰めながら嫌そうにルイズが返す。

「お早うキュルケ。ええ、本当に賑やかでしたとも」

実はルイズが才人をノックアウトした後、自分の着替えを手伝わせようとしてまた一悶着起こしていたのである。

男の沽券に関わると断固拒否する才人に、業を煮やした彼女が「アンタ朝ご飯抜き！」と切り札を突きつけて強引に従わせなければまだ騒いでいたかも知れない。

先程までの情景を思い出して憮然とする才人を、キュルケと呼ばれた美女が品定めするかの様に眺める。

「ふうん、ほんとに人間なのね。ねえルイズ、これが貴女の使い魔なのかしら？」

「……そうよ。悪い？」

にやにや笑いを貼付けたまま確認してくるキュルケに、敵意を隠さず噛み付くルイズ。

その受け答えに琴線が触れたのか、いきなりキュルケが笑い出す。

「あつははは！ 『サモンサーヴァント』で平民喚んじやうなんて、
凄いじゃない！」

流石は『ゼロのルイズ』ね！」

「煩いわね！ 私だつてまともな使い魔が欲しかったわよ！」

突然始まつた女同士の口喧嘩に一瞬呆氣に取られた才人だが、すぐ
気を取り直してキュルケに話し掛ける。

「なあ、アンタ。キュルケでいいのか？」

「あら、何かしら平民さん？」

明らかに馬鹿にした様子で応えるキュルケに、才人は少しだけム
ツとしながらも告げた。

「俺もコイツも好き好んでこうなつた訳じゃ無い。馬鹿にするのは
止めてくれ」

「「は？」」

キュルケとルイズが同時に間抜けな声を漏らす。

その様子に（仲良いなコイツら）と思いながら才人は言葉を続け
た。

「俺だつて突然こんな所に呼ばれるなんざ不意だし、コイツだつ
て平民だかなんだか知らねえが、とにかく人間を使い魔にするなん
て思つても居なかつたんだ。」

お互い不幸な出来事が偶々重なつちまつただけだつてのに、それ
をダシに馬鹿にされるのは正直気分が悪い。だから止めてくれない
か？

そう言う事だから、お互い仲良くしようぜ。俺は平賀才人、日本
つて国から来た。アンタの名前は？」

そう言いながら右手を差し出す才人。異世界とはいえ生活様式は欧米に近いから、お辞儀よりは握手だろうと思ったからだ。

差し出された右手に一瞬戸惑ったキュルケだが、やがて微笑みを浮かべながらその手を握り返す。

「変わった名前ね。あたしはゲルマニアのキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。二つ名は『微熱』よ」

「長げえ名前だな。二つ名って？」

「あら、貴方の国のメイジ達には二つ名って無いのかしら？」

才人の質問に質問で返すキュルケ。

ちよっとだけ名残惜しく思いつつ、握手の手を離しながら彼女の疑問に応える。

「俺の国にはメイジが居ないんだよ。それ所か魔法自体存在しないしな」

「メイジが居ない！？……驚いた、貴方って余程田舎に住んでたのね。それじゃあ二つ名も知らなくて当然かしら。」

そうね、二つ名って言うのはメイジが得意とする系統や魔法にちなんで付けられる渾名みたいなものよ。あたしの属性は『火』だから、微熱のキュルケって訳。

ささやかに燃える情熱で、男の子をみんな虜にする所から来てるわ。貴方もどうかしら？ あたしの恋心を業火の様に燃え上がらせてくれるならね」

妖艶に微笑みながらそう告げるキュルケにどう返していいか解らず焦る才人。

それを見てルイズの脳が再起動する。

「ちょっとキュルケ！」

アンタ人の使い魔にまで手を出そうなんて、何考えてんの!？」

騒ぎ立てるルイズを面白そうに眺めるキュルケ。

頭一つ分低い彼女の頭頂に手を置き、子供の様に撫で回す。

「ふふつ、あたし程じゃあ無いけれど、中々良い使い魔を喚んだじやないのルイズ。彼、もしかしたら大当たりかもよ？」

「知らないわよ！ 止めなさいキュルケ！ こら、撫でるなー！」

傍目には仲の良い姉妹の戯れ合いにしか見えない遣り取り。

尤も、見た目が違いすぎる上にルイズは本気で嫌がっているのだが。

「そうね、あたしも使い魔を紹介しなくちゃいけないわね。おいで、フレイム！」

キュルケの呼び掛けに、扉の影からのそりと現れたのは真っ赤で巨大な蜥蜴だった。

大きさは虎位だろうか、尻尾が燃え盛る炎で出来ており、よく見れば口からも細い炎をまるで舌の様に吹き出している。

完全無欠にファンタジーな生き物を見て、才人の常識がまた一つ破壊された。

……今更では有るが。

「うつわ……、尻尾が燃えてるよ。なあ、コイツ鎖とか首輪とか付いてないみたいだけど、人に噛み付いたりしないのか？」

驚きはするものの、いきなり異世界に連れて来られたり人が空飛

んだりした後ではインパクトが薄い。

まして美少女の着替えと云うピンク色なイベントの後では何をか言わんや。

冷静に火蜥蜴を観察する才人にキュルケは感心する。

学院に勤める使用人でさえ彼女の使い魔に出くわせば慌てふためくと云うのに、彼は驚いてはいるものの取り乱したりはしていない。

「大丈夫、あたしが命令しない限り襲ったりしないから平気よ」

「これってサラマンダーよね？　そういやアンタ『火』の属性だったわね」

ようやくキュルケの手から解放されたルイズが悔しさを滲ませながら確認する。

自分と違い、見事な使い魔を召喚した彼女に若干の嫉妬を覚えたからだ。

「そうよ、間違いなく火竜山脈の火蜥蜴よ。こんなに鮮やかで大きい炎の尻尾がその証拠だわ。素敵でしょ？」

だがそれを無視して使い魔自慢を始めるキュルケ。

どうやら自分の属性びつたりの使い魔を喚び出せた事で少々浮かれているらしい。

「じゃあお先に失礼、ルイズ。そちらの使い魔さんも、後でお話ししましょうね」

そう告げて立ち去るキュルケの後をフレームと呼ばれたサラマンダーが追いかける。

その後ろ姿が見えなくなった所でルイズが痼癢を起こした。

「悔しいいいッ！ 何よあの女！ 散々使い魔自慢をただけじや飽き足らず、今度は人の使い魔にまで色目使うだなんて！」

「色目つつーか、こつちをからかつてるだけに見えたけどな。良いじゃねえか別に、使い魔が何だつてさ」

才人の慰めにもならない言葉に、ルイズは血の涙を流す勢いで彼を睨みつけた。

「何言ってるのよ！ メイジの実力を量るには使い魔を見ろって言われてる位、メイジにとって使い魔は重要なのよ！」

なのにどうして、あの色ボケ女がサラマンドーでこの私がアンタなのよ！ しかもよりによってツエルプストーに目を付けられるなんて！

正直アンタなんか惜しく無いけど、アイツに持つてかれてもしたらご先祖様に申し訳が立たないわ！ 全く、何でこんな事に……！」

段々ルイズの台詞が愚痴っぽくなって行く。

とりあえず才人は気になった事を聞いてみる事にした。

「なあ、アイツと仲悪いみたいだけど何かあったのか？」

お隣さんだろ、仲良くすれば良いじゃねえか」

その言葉と同時にルイズの愚痴が止まった。

齒軋りの音が人気の無い廊下に響き渡り、握り締めた拳に力が籠って行く。

（やべっ！ 地雷踏んだか？）

冷や汗を垂らす才人の耳に、地獄の底から響く怨霊の様な呟きが入ってきた。

「そうね、お隣さんよ。寮の部屋だけじゃなくて、実家の領地もだけれど、ね。」

キュルケはトリステインの貴族じゃないの。隣国ゲルマニアの有力貴族の子女よ。そして私の実家ヴァリエール領はゲルマニアとの国境に面してるの。

……もう解るでしょう？ あのキュルケの実家とは国境を挟んで隣同士なのよ。しかもヴァリエールの一族は先祖代々筋金入りのゲルマニア嫌いで知られてるわ。

お陰で戦争になったらまずヴァリエールとツエルプストーが先陣切って杖を交えるのが慣例になってる位よ。まさに不倶戴天の天敵って所ね」

成程、それでは仲も悪くなるうと言うものだ。

ルイズの説明に才人は納得したが、一つだけ解らない事があった。

「そいつは御愁傷様。でも俺に関係なくないか、それ？」

そう、先程のルイズの愚痴は才人を横取りされる事を危惧する口ぶりであった。キュルケの言動を見る限り、彼女をからかう為の軽口だろうが。

それ故の才人の台詞だったのだが、それを聞いた途端ルイズは爆発した。

「関係なく無いわよ！ 私のご先祖様はツエルプストーに恋人を散々奪われたの！ それだけじゃないわ！

戦争が起こるたびにお互い殺し合った人数は数えきれない程！

アンタもヴァリエール公爵家の禄を食んでる以上、アイツに奪われたら一族の恥よ！」

「そんなに大層な事なのか？」

「それにね、キュルケの色ボケは有名なの。しょっちゅう恋人を取替え引つ替えては部屋に連れ込んでるって噂は絶えないわ。

あまつさえ平気で人の恋人を奪うって言っし、アイツの色香に誑かされた男も沢山居るから、アイツを恨んでる奴なんて大勢居るわよ。

もし平民がキュルケの恋人になったなんて噂が立つたら、アンタ絶対無事じゃあ済まないわね」

「そうなのか？」

恋人なぞ生まれてこのかた存在すらした事が無い才人。当然のことながら、色恋沙汰から人傷沙汰に発展する話などフィクションでしか知らない。

才人は修羅場の果てに流血沙汰に発展したある作品を思い出し、戦慄する。

「解った。Nice Boatなんて冗談じゃないしな。くわばらくわばら」

悪寒に震える身体を抱える才人に胡乱な目を向けるルイズ。

「ないすぼーと？ 何よそれ？ …… まあ解ったのなら良いわ。

それより早く行きましょう。アンタに説明してたらお腹が空いちやったわ」

そう言っって食堂に向かうルイズの後ろを才人が慌てて追いかけて行った。

04 初めての授業と不義の決闘

トリステイン魔法学院の本塔にあるアルヴィーズの食堂には既に生徒達が並んでいた。

ルイズの話では教師も生徒も三食ここで摂るらしい。

「学院のモットーは『貴族は魔法をもってしてその精神となす』。だから全てに於いて貴族足るべき教育を受ける事になるの。」

貴族に相応しい食卓で貴族に相応しい食事を、貴族に相応しい作法でいただくのもその一つって訳ね」

無い胸を反らし誇らしげに語るルイズだが、才人は殆ど聞き流していた。

銀の燭台や色とりどりの花で豪華に飾り付けられた長卓に並んだ、これまた豪華なメニューに目が釘付けになっていたからだ。

朝食だと云うのにメインは大きな鳥のロースト。副菜には鱒のパイ包み焼きが並び、さらには高級そうなワインが何本も取り揃えられている。

間違いなく才人の人生の中で最高の御馳走が目の前に並んでいるのだから、彼の関心がそっちを向いてしまっても無理は無い。

「朝からすげえ豪勢だな！ 流石は貴族の食事って所か？ こんなに食いきれないだろ普通！」

口の端から垂れた涎を拭い、はしゃぐ才人の肩を誰かが叩く。見ればルイズが不機嫌そうに彼を睨み付けていた。

「何だよ？」

彼女の機嫌を曲げる理由に思い至らない才人がそう聞く。

するとルイズは床を指差す。つられて視線を下げてみれば、床の上に何かがある。

それはスープの入った皿であつた。小さな肉の欠片が浮いている以外に具の様なものは無く、皿の隅には堅そうなパンが二切れ置いてあるのみ。

「……何これ？」

嫌な予感が沸き上がってくるのを無理矢理押さえ、才人はルイズに確認する。

そしてルイズは才人の予想通りの台詞を放った。

「アンタの御飯に決まつてるでしょう？」

「……床に置いてあるみたいなんだけど？」

「平民のアンタが貴族と同じ席に座れる訳が無いでしょうに。そこで食べなさい」

「……酷くない？ 一応人間だぜ、俺」

「本当なら使い魔はここに入れないのよ。私の特別な計らいで入れてあげてるのに、文句あるの？」

「……大有りだ。こんな扱いあるかよ」

「だったらアンタ御飯抜き。外で待つてなさい」

弱々しい抗議の声も、ルイズの鶴の一声には敵わない。

思えば昨日から何も食べていないのだ。ここは逆らわずに従わねば、一兩日中に飢えて死んでしまう。

そう自分に言い聞かせ、才人は床に直接座り込む。冷たい床が足を容赦なく冷やし、固い石畳が才人を責め立てた。

（痛い！ 冷てえ！ 畜生、何の拷問だよ！）

心の中であらん限りの罵声を上げる彼を他所に、席に着いたルイズ達が目を閉じて食前の祈りを捧げる。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもつた事を感謝いたします」

唱和された台詞に、才人は首を伸ばして食卓を飾る料理の数々に目を向けた。

きらびやかに輝く豪華な料理。目を落としてみれば、貧相とすら言えないスープが一皿。

（何が『ささやか』だよ。それがささやかだってんなら、こっちは生ゴミかよ）

日本で飼われている犬や猫とて、もっともな物を食べているだろう。

愛玩動物以下の扱いである事に落ち込みながら、才人は食事に手をつける。

予想通り堅いパンは齧るにも一苦労だ。冷えきったスープに浸してから口の中に押し込んでみるが、とても食べ易いとは言いがたい。横目で覗き見れば、ルイズが鳥のローストを美味そうに頬張るのが見えた。

長卓を境にはっきり分かれた天国と地獄。泣きそうになりながら、才人は残りを掻き込んだ。

才人を連れたルイズが教室に入ると、周囲の生徒達から忍び笑いが漏れた。

どうやらルイズが春の使い魔召喚の儀式で平民を召喚した話は、もう既に結構な範囲で知れ渡っているらしい。

大学の講義室を石造りにした様な教室に登り、適当な席に腰掛ける。才人もそれに習おうとして、ルイズに止められた。

「ここはメイジの席よ。使い魔は座っちゃ駄目」

「ここで床に座ったら机が邪魔で何も見えねえよ。何時間授業するんだか知らねえが、せめて椅子には座らせろ」

押し問答の末、ルイズは才人が椅子に座るのを許可した。本日初めての間接的に涙目になりながら隣の席に座り、改めて教室の中を見渡してみる。

生徒達は皆、使い魔を連れていた。

椅子に止まって黒い羽を休める鳥や、机の下で毛づくろいをする猫と言った普通の動物達の中に、見た事も無い動物が混じっている。六本足の蜥蜴が軽快な足取りで駆け回り、目玉の化物が浮かんでいる。人間らしき人影に目をやれば、下半身が蛸になっていた。

少し離れた席にキュルケが玉座に君臨する女王の如く周囲に男子生徒を待たせており、その足下でサラマンダーが眠りこけている。ああ、本当にファンタジーなんだな。その光景を見た才人はそんな感想を浮かべた。

現代地球から突然ファンタジー世界に放り込まれる、という物語の設定は漫画や小説に限らず、ゲームや映画にも結構多い。

現代日本の標準的な高校生らしく、ゲームや漫画の嗜み位は一通り備えていた才人も結構好きなジャンルだったが、

いざ自分の身に降り掛かって覚えるのは高揚や期待ではなく、理不尽な状況に対する失望のみ。

（そうだな。有り得ないから面白かった訳で、実際起こったら洒落になる訳無いつつの）

嗚呼、自分は何故あの時彼等の苦境を羨んでしまったのか……と、

フィクションの登場人物達に心の内で謝罪をしている内に授業が始まった。

壇上に上がったのは中年の女性。紫色のローブを纏い、ふくよかな体型が優しそうな雰囲気醸し出している。

「皆さん、無事に使い魔召喚を成功させたようですね。このシュブルーズ、毎年この時期がとても楽しみなのですよ」

一通り教室の中を見渡すと、彼女は満足そうに微笑みながらそう告げた。そして視線を才人とルイズに向ける。

「ミス・ヴァリエールも、ちょっと変わった使い魔ですが無事に召喚出来た様ですね」

その言葉に教室中が沸いた。シュブルーズがルイズをからかう冗談だと受け取ったのだ。

「ゼロのルイズ！ 召喚出来ないからって平民なんか連れてくるなよ！」

梟を肩に乗せた小太りの生徒が囁し立てる。

（『ゼロ』のルイズ？ それがコイツの二つ名なのか？ どういう意味だ？）

才人がその罵声に首を捻っていると、その言葉をぶつけて来た生徒にルイズが猛然と噛み付いた。

「違うわ！ 召喚はきちんと出来たもの！ コイツが勝手に出て来ただけよ！」

段々二人の口調が熱を帯びてくる。突然起きた口喧嘩を、教室中の生徒達が嘲笑いながら見物している。

それを見た才人の胸中に何とも言えない不快な物が浮かんで来た。

実の所、シュヴルーズにはルイズを貶める意図は全く無い。

彼女がルイズ達のクラスを受け持つのは初めてだったが、他の教師達から噂は聞いていた。

曰く、大変な努力家にも関わらず、魔法が成功しない生徒が居ると。

その話を聞いた時、シュヴルーズは心から悲しんだ。報われない努力ほど残酷な物は無い。それが未来ある子供であれば尚更だ。

そんなルイズが使い魔召喚を成功させた。

召喚されたのが平民だったと云うのは確かに前代未聞だが、シュヴルーズにとってはルイズの努力が実を結んだ事の方が大きかった。それを聞いたシュヴルーズは我が事のように喜び、彼女を祝福する。為他の教師達に頼みこんで最初の授業を担当させてもらったのである。

先の台詞は努力が報われたルイズへの祝福のつもりだった。只、生徒達および本人がそう捉えなかっただけの事。

だからルイズに『鍊金』の実技を行わせたのも彼女なりの詫びのつもりだった。

『サモンサーヴァント』に成功したのなら『鍊金』にも成功するかもしれない。

成功したのならルイズの名誉は一気に回復するだろうし、失敗し

たとしても何故失敗するのか位は指摘してやれるだろう。

そうすれば前向きに努力出来るルイズの事だから、時間がかかったとしてもいつかは魔法を使いこなす事が出来る筈、そう考えていた。

もう一度言おう、シュヴルーズにはルイズを貶める意図は全く無かった。

彼女は何処までも心優しく熱心な教育者であり、落ちこぼれたルイズを励ましたかっただけなのだから。

シュヴルーズの失敗は只一つ、ルイズの失敗とはどんな結果をもたらすのか、それを知らなかった事だけだった。

荒れ果てた教室を黙々と片付けるルイズと才人。二人以外に人の姿は無い。

シュヴルーズに指名されたルイズが教卓に向かった途端に、前列の生徒達が一齐に机の下に隠れるのを見て、

悪い予感を覚えた才人がそれに習って隠れた瞬間、ルイズの魔法を受けた小石が教卓ごと爆発したのである。

才人は恐る恐る机の下から顔を出して教卓の辺りを窺った。

吹き飛んだ教卓、黒板に叩き付けられて気を失ったシュヴルーズ、爆音に怯えて暴れ出した使い魔と鎮めようとする生徒達。

阿鼻叫喚の教室の中心で、ぼろぼろになったルイズが淡々と自身の見解を述べる。

「ちょっと失敗したみたいね」

「何処がちよつとだ！ 成功確率『ゼロ』の癖に！」

「今まで一度でも成功させた事無いだろう！ もう退学してくれよ、『ゼロ』のルイズ！」

次々と彼女に浴びせられる罵声、それを聞いた才人はルイズがなぜ『ゼロ』と呼ばれているのか理解した。

その後、二時間程で息を吹き返したシュヴルーズに罰として教室の後片付けを命じられたのである。

魔法の使用は禁止されていたが、もとより魔法の使えないルイズにとって意味は無い。

とはいえガラスや机の入れ替えの様な重労働はほぼ才人が行っており、ルイズは煤けた教室を雑巾掛けしていたのだが。

二人とも無言で仕事を進めて行く。その静寂に耐えられなくなったのか、ルイズが独り言の様に語り始めた。

「……可笑しいでしょう？ 魔法が使えない貴族なんて。

そうよ、私は魔法が使えないの。どんな魔法もあんな風に爆発しちゃうわ。

アンタを召喚した『サモンサーヴァント』が初めての成功なのよ。なのに、呼ばれたのは何も出来ない平民だったなんて。

本当、『ゼロ』のルイズにぴったりの使い魔だわ。……何よ。黙ってないで何か言ったらどう？」

自虐気味の彼女の独白を聞き流しながら作業に没頭する才人に、ルイズの苛立ちは募るばかり。

元タルイズは気の長い方ではない。その上、思春期の多感性も相俟って癪癢持ちと余り変わらない気性を有している。

同じ様なことを数回繰り返した後、とうとう彼女は感情を爆発させた。

「いい加減にしなさいよ！ 何黙ってるの！ 言いたいことがあるなら何か言いなさい！」

雑巾を足下に叩き付け、才人を怒鳴り付けるルイズ。その視線の先で、机を並べていた才人が初めて作業の手を休め、彼女と目を合わせる。

「だから何？ 魔法が使えないのと掃除が進まないのが何か関係あるのか？ さつさと終わらせようぜ、もうすぐお昼になるからな」「んな！？」

「あと俺に延々愚痴られてもどうにもならねえよ。出来なきゃ出来る様に頑張るしかないんだし。」

実際俺の召喚は出来てんだから全く魔法が使えない訳じゃねえし、出来ない原因が分かれば何とか出来るんじゃないのか？

ここは魔法の学校なんだろ？ そこんとこ誰も教えてくれなかったのか？ だったら先生の教え方が悪いんだろうよ」

もしも彼が生来のお調子者のままであれば、やっと見つけたルイズの弱点を嫌味たつぷりにからかう位はしていただろう。

そうして彼女の心証を決定的に悪くしていたのかもしれない。

しかし今の才人はある種の悟りを得ている状態だった。

召喚前後から続く不幸の連続が、一時的に彼を至高の境地へ至らせたのである。その境地には『諦め』と言う枕詞が付くが。

才人からすればルイズが魔法を使おうが使えまいが、彼女が自分の不幸を加速させた張本人であること以外に関係無かったのだ。

その上肝心の召喚すら双方にとって不本意な事故だったのだから、ルイズをなじる真似など出来よう筈も無い。

精々昨日から募らせている神への悪態を繰り返す位だ。

それ故に才人はルイズの怒鳴り声に捨て鉢な反応しか返さなかったのだが、彼女にとってそれは青天の霹靂とも言える出来事であった。

昨晚や今朝の言動を見る限り、才人がルイズに心から従っている訳ではない事位は彼女にも解る。

それでもここで生きる為にはルイズを頼らざるを得ないのだ。それが相当な苦痛である事が解らない程彼女は愚鈍ではない。

だから彼女は虚勢を張った。彼にわざと厳しく接することで、彼が自分を見下すことが無い様にする為に。

にも拘らず暴露されてしまった『魔法が使えない』という事実。今までにこれを知った人間の反応は大きく二つに分けられる。

すなわち嘲笑と憐憫だ。貴族であれ、平民であれ、露骨に表すか影に隠すかの違いだけで、彼女を知る全ての人間がどちらかの態度を取る。

それはルイズを下に見る事と同じこと。使用人が彼女を憐れんでいるのを聞き、平民にさえ馬鹿にされていると落ち込んだのは一度や二度ではない。

だから才人も今までと同じく、魔法も使えないにも拘らず貴族を名乗る自分を見下すのであろう、と考えていたのだ。

なのに肝心の才人はそれを意に介さずに黙々と教室を片づけるのみ。

何の反応も返さない彼の態度が癪に障り、思わず怒鳴り付けてから内心後悔しても後の祭り。

だが、彼の口から飛び出して来たのは罵声でも嘲笑でも嫌味でもなく、『それがどうした』と言う言葉だけ。

才人に取っては只の状況確認でしかない。彼は只、手を止めて喚き散らすルイズにさっさと掃除に戻って欲しかっただけなのだから。

しかしそれは彼女に取って正に福音の言葉であった。

気付けばルイズの鳶色の瞳から、幾つもの涙が溢れていた。

平民の前で貴族が涙を見せるなど在于てはならない。頭では解っている、どうしても止めることが出来ない。

「わあ！？ 何泣いてんだ、お前？ …… 解った解った。ここは俺

が掃除しとくから、先に飯食ってこいよ。ほら、行った行った」

何を勘違いしたのか、才人が滂沱の涙を流すルイズを宥め、背中を押しやる様に教室から追い出す。

「朝と同じ食堂だろ？ 終わったら行くから、俺の分の飯取って置いてくれ。どうせ又あの堅ってえパンなんだろうし」

そんな事を言いながら掃除に戻る才人。その後ろ姿に何か言わなくては、と言葉を探すルイズだが、言うべき言葉が思い浮かばない。結局、彼女は誰も居ない廊下を一人食堂に向かいながら、才人に届かない事を承知で呟くことしか出来なかった。

「ありがとう」と言う言葉を。

「や、やっと終わった。……無駄にでかいんだよ、この教室。結局昼になっちまったじゃねえか」

ようやく元の姿を取り戻した教室の中心で、大きく伸びをしながら恨み節を炸裂させる才人。

時刻は昼時をいくらか回った所か。見る者が見れば多少粗が見えるものの、この規模の教室がこれだけの時間でよく片付いたものだと感心するだろう。

「さて、あんまり遅いと飯が片付けられちまいそうだし、さっさと

行くか」

ぶつくさ言いながら食堂へ向かう。

「しかしルイズの奴、泣く程腹が減っていたならそう言えば良かったのに。あ、それとも掃除が嫌だったのか？」

先程のルイズが聞けば『私の涙を返せ！』と激怒しそうな独り言を呟きながら歩く姿は、端から見れば変人以外の何者でも無い。だからそのメイドが、笑顔を引き攣らせながら話しかけた言葉が「あ、あの、大丈夫ですか？」だったのは仕方が無い事かもしれない。かった。

「え、あ、俺？」

急に話しかけられた事で我に返る才人。どうやら思索に耽るあまり、食堂を通り過ぎてしまったらしい。

「はい、そうです。……ええと、ミス・ヴァリエールの使い魔になったって言う平民の方ですよね？」

話を通じることを確認したらしい。引き攣っていた笑顔が、ほっとした笑顔になる。

学院では珍しい黒髪をカチューシャで纏めた、才人と同年代位の少女だ。

そばかすの残る素朴な可愛らしさが、ルイズとはまた違った方向で才人の好みに直撃する美少女である。

（ルイズやキュルケもそうだけど、可愛い子多過ぎだろ！？ 神様ありがとう！）

才人は表面上は冷静を装いながら、先程まで罵倒しまくっていた神に今度は感謝を捧げる。日本人ならではの切り替えの早さだ。

「ああ、そうだよ。俺は平賀才人、日本って国から来たんだ」

「日本、ですか？」

「君も魔法使い？」

才人の自己紹介を聞き、小首を傾げるメイドだが、続いて発せられた質問に慌てて応える。

「い、いえ、私も平民です。縁在ってこちらでご奉公させていただいております、メイドのシエスタと申します」

そこまで言ったとき、才人の腹の虫が鳴いた。

「あ、ごめん。昼飯食いつぶれたもんだから、腹減ってて」

「あらら、そうだったんですか。でももう食前の祈りも終わってますし、今食堂に入るのは止めた方が良くと思いますよ？」

申し訳無さそうにするシエスタに、今度は才人が慌てる。

「いや、遅れたこっちが悪いんだし。だけど困ったな、このままだと絶対夜まで持たねえよな……」

才人は腕組みして考え込む。別に名案が浮かぶ訳でもないが、盛んに空腹を主張する胃を誤魔化す為のポーズである。

「あつ、そうだ！」

代わりにシエスタが何かを思いついたらしい。掌を打ち合わせ、微笑む姿に才人は一瞬萌えた。

「賄い食でよろしければ、厨房で食べられますよ。いかがですか？」
「是非お願いします！」

断る理由は無かった。

余り物で作ったと言うシチューはとても美味しかった。三回目の
お代わりを平らげた才人は漸く一息つく。

「余程お腹が空いていたんですね。こんなので宜しければいつでも
来て下さいね」

才人の食べっぷりを見ていたシエスタが微笑みながらそう提案す
る。それを聞いた才人の目から幾つもの涙が溢れ出した。

「ど、どうしたんですか？」

いきなり泣き出した才人に慌てるシエスタ。

「……俺、こつちに来てから優しくされたの初めてで……ああ母さ
ん、此処にも人情は在りましたよ……」。

なあシエスタ。俺、何か手伝えないかな？　こんなにご馳走して

貰って何もしないなんて、不義理なことはしたくない」

「義理堅いんですね。解りました、じゃあ食後のデザート配膳を手伝っていただけますか？」

「解った、任しとけ！」

そんな平和な遣り取りが在ったのは十分程前だったろうか。

現在才人は金髪を巻き髪にした気障ったらしい少年に絡まれている真っ最中だった。

「いいかい？ そのメイドが軽率にも香水の壘を拾い上げた所為で、二人のレディの名誉が傷ついた。この責任、どう取ってくれるのかね？」

頬に鮮やかな手形を浮かべ、頭からワイン塗れになった少年は才人には理解出来ない理屈を並べ立て、才人に迫ってくる。

「責任も何も、シエスタはお前が落とした壘を拾っただけだ。何も悪いことはしてない。そもそも、二股掛けてたお前が悪いんだろ」
「が」

反論しながら、才人はどうしてこうなったのかを整理する。

切っ掛けはケーキ配りの最中に目の前の貴族、ギーシュと言らしい少年が小壘を落としたのを才人が偶然目撃したことだった。

普段の彼ならすぐ拾い上げる所だが、ルイズの様子から貴族との付き合い方を考え直していた才人はまずシエスタに相談。

学園付きのメイドたる彼女なら適切に対処してくれるだろうと考えての事だったのだが、結果的にその判断が悪い方向へ向かってし

まった。

才人の話を聞いたシエスタはすぐ小壘を拾い上げてギーシュに渡そうとしたが、彼は何故か『自分の物ではない』と主張したのである。

ならば小壘の持ち主に心当たりはないか、そう尋ねるシエスタにギーシュが返答を濁しているうち、その小壘に見覚えのあった生徒達が騒ぎ始めた。

どうやらその香水はモンモランシーなる女生徒の作である、と看破したらしい。

騒ぎを聞き付けた他の生徒達が成り行きを見守る中、一人の女生徒がギーシュの前に躍り出た。

ケティと言うその一年生は彼がモンモランシーと自分の二股を掛けていた事をなじり、平手をくれて涙目で去って行った。

次に出て来たのは件の香水の制作者、モンモランシーその人である。

彼女もまたギーシュの不義理をなじり、長卓にあったワインを彼の頭にぶち撒け、やはり涙目で去って行った。

ここでギーシュが自分の非を認め、二人の後でも追いかければ場は丸く収まったかもしれない。

しかし彼は事も在るうにシエスタに詰め寄ったのだ。

理不尽な怒りを振りかざすギーシュと、怯えて涙目になりながらも逃げられない彼女の間に才人が割り込み、現在に至る。

（うん、やっぱり俺、悪くない。悪いのはコイツの方だよな、常識的に考えて）

そう結論付けた才人を余所にギーシュはますます激昂してゆく。

「あんな給仕君、僕が知らないフリをしたのだから、そのメイドも話を合わせるくらいの機転は効かせるべきだろう？　これだから平民は……」

「平民も貴族も関係ないっての。二股なんかその内バレるに決まってる。後、俺は給仕じゃないぞ」

「うん？」

その言葉に改めて才人を眺めやるギーシュ。そう言われてみれば学院に勤めている給仕とは服装が違っし、才人の顔にも見覚えが無い。

いや、見覚え自体はある。確か昨日、『使い魔召喚』の儀式の時に『ゼロのルイズ』が喚び出した平民だ。

「確か、あのゼロのルイズが喚び出した平民だったか。なら余計な口出しは無用だ。早くどこかへ行きたまえ。」

僕はこれから、其処のメイドに貴族への奉仕について教育しなければならぬんでね。君の相手はしていられないのさ」

薔薇を口に銜え、前髪をかき上げ、鼻を鳴らして馬鹿にした口調でギーシュは命令する。

それが才人の癪に障った。

「うるせえキザ野郎。手前の悪事を他人に押し付けるのが貴族だつてか。まして女の子を泣かせる奴がカッコ着けてんじゃねえよ。」

大体なんだその薔薇。ママのオツパイの代わりか？　だったら一生しゃぶってる、マザコン貴族が！」

才人の啖呵にざわめく野次馬。貴族にここまで楯突く平民など、彼らの常識には有り得なかったからだ。

そしてそれはギーシュも同様だった。いや、当事者である以上、

彼が受けた侮辱は許せる範囲を超えていた。

「ほう……、どうやら君は貴族に対する礼儀を知らないようだな。いいだろう、あのメイドよりも先に君を教育するでしょう。」

ケーキを配り終えるまでは待つてやる。仕事を終えたらヴェストリの広場まで来たまえ。ちょうどいい腹ごなしだ」

そう言つて身を翻すギーシュ。その後を期待に満ちた表情を浮かべた数名の男子生徒が追う。

才人もその後を追おうとするが、袖口を掴まれてつんのめる。振り返れば、顔面を蒼白にしたシエスタが小刻みに震えていた。

「あ、あなた、殺されちゃう……貴族を本気で怒らせるなんて……」

「大丈夫だつて。あんなひよるスケに負けるかつての」

「ひつ……!？」

安心させようと笑いかける才人だったが、それを見たシエスタは短く悲鳴を上げると走り去ってしまった。

取り残された彼は首を捻る。もやしにしか見えないギーシュだが、ひよつとすると物凄く喧嘩強いのだろうか？

うーむ、と唸る才人の後ろからルイズが走り寄ってきた。何故だか酷く焦っている。

「ちょっと、アンタ！ 何してんのよ！」

「よう、ルイズ。何か、決闘することになっちまった」

飄々とした才人の様子から、ルイズは彼が自分のしでかしたことの重大さを理解していないことを悟る。

溜め息を吐き、肩をすくめる彼女を不思議そうに見る才人。いつそ能天気と言つて良いその表情に、あの空き教室の出来事は夢だっ

たのではないかと疑い始めたルイズが口にしたのは降伏勧告だった。

「謝っちゃいなさいよ。怪我したくないでしょ？ 今なら許してくれるかもしれないから……」

「嫌だ」

ノータ임で帰ってきた拒絶に、ルイズは一瞬だけ呆然とする。そして踵を返そうとした才人を見て我に返り、慌てて引き止めた。

「何言ってるのよ、相手は貴族なのよ？ アンタじゃ絶対に勝てないし、怪我だってするわ！ いいえ、怪我で済んだら運がいいわよ！」

「だって俺、悪くないし。元と言えばあのオカマ野郎がシエスタを馬鹿にしたのが悪いんだし、そのシエスタも親切で拾ってやったんだぜ？」

謝るとしたらアイツの方だろ。そもそも女の子を泣かせた時点で有罪だっての。悪いが俺、引かないぜ？」

ルイズの説得を軽くないす。

実の所、才人は事態を重く見てはいなかった。精々喧嘩にしては大袈裟だな、ぐらいにしか認識していない。

それに、昨日から続いた鬱憤の晴らし所を探していたのも大きかった。

お互い意図していなかった事故である以上ルイズを責める訳にもいかず、悶々としていたところでこの騒ぎ。言っては悪いが、ギーシュのことは鴨葱としか思えなかった。

だが、それは彼が平成日本と言う得難き平穏な環境に居ればこそ。何処とも知れぬ異邦の地で、現代日本人の常識が通じる筈も無い。

「こ、この分からず屋！ 聞いて、メイジに平民は絶対に勝てない

のよ！」

「そんなの、やってみないとわからないさ。……おい、ヴェストリの広場ってのはどこだ？」

ルイズの制止を聞き流し、才人はニヤニヤと厭らしい笑顔を貼付けた男子生徒に決闘の会場を尋ねる。

「こつちだ、平民。着いてこい」

見張りのつもりだったのだろう、一人だけ残った取り巻きが顎をしやくって歩き出した。その後を今度こそ才人が追う。

「ちょ、ちよつと！……本当に行っちゃった。ああもう、使い魔のくせに勝手なことばかりするんだから！」

そしてその後ろ姿を、ルイズが追いかける。

そうして消えていく一行を、学院の使用人達が不安と憐憫の目で見送っていた。

05 青銅のメイシ？と戦士の覚醒

ヴェストリの広場は時ならぬ喧噪に沸き上がっていた。

ギーシュと才人の決闘を噂を聞きつけた生徒達で溢れかえっていたからである。

「諸君！ 決闘だ！」

才人が広場に姿を見せると同時に、待ち構えていたギーシュが薔薇の造花を掲げて宣言すると、途端に見物客から歓声が巻き起こった。

「ギーシュが決闘するぞ！ 相手はルイズの平民だ！」

誰かの台詞に『名前ぐらい呼べよ……』と内心苦々しく思いながら、手を振って観客に応えているギーシュに歩み寄る。

それに気付いたギーシュもまた才人に向かって歩み寄り、丁度広場の真ん中で睨み合う様に対峙する。

「とりあえず、逃げずに来た事は褒めてやろうじゃないか」

「てめえみたいな男の風上にも置けねえ下種野郎相手に、なんで俺が尻尾巻いて逃げる必要があるんだ？」

ギーシュの挑発に啖呵を切る才人。

その返答に再び浮かんできた激怒をかみ殺すギーシュ。

「いい度胸だ。それじゃあ、始めよう」

戦闘開始の言葉と同時に才人が走る。目標はギーシュの鼻っ柱だ。

「喧嘩は先手必勝、ってな！」

助走の勢いに乗せて放たれた拳は、けれど行く手を甲冑に遮られた。

「な、なんだこりゃ！？」

いつの間にか才人の前に立ち塞がっていたのは、女戦士の姿を模した青銅の人形だった。ギーシュが薔薇の造花を振って舞い上がった花びら、それが変化したのだ。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。僕の二つ名は『青銅』、青銅のギーシュだ。

だから青銅のゴーレム、『ワルキューレ』が御相手するよ。文句はあるまい？」

言うが早いか、青銅の人形『ワルキューレ』のパンチが才人の腹に決まる。

「げぶっ！！」

耐えきれずに崩れ落ちる才人。その様に観客達から歓声が上がった。

「おやおや、もう終わりかい？ 大層な口の割には呆気ないね」

ギーシュの嘲りが遠くに聞こえる。

観客達が上げる嘲笑と罵声。圧倒的多数の罵倒の中、才人の耳に新たな声が届く。

「ギーシュ、いい加減にして！ 決闘は禁止されている筈でしょう！」

（この声……、ルイズか？）

「禁止されているのは貴族同士の決闘だ。平民との決闘なんて誰も禁止していない。」

ましてやこれほどの無礼を働いた平民ならば、躰の為に少々 of 乱暴もやむを得ないさ」

「だからって、何の力も無い平民相手にゴーレムまで持ち出すなんて、やり過ぎでしょう!？」

「やけに平民の肩を持つね。……さてはルイズ、同じ無能同士で同情でもしているのかな？」

「な……!！」

ルイズが言葉に詰まる。それは怒り故の絶句だった but、ギーシュは彼女が凶星を指された為に絶句したのだと解釈した。

「ははははは、これは傑作だ！」

『ゼロの』ルイズが召喚した使い魔は同じく無能な平民ときた！
何ともお似合いじゃあないか！」

ギーシュの嘲笑に観客からも笑い声上がる。中にはあからさまに侮蔑の視線をルイズに向け、聞くに堪えない罵詈雑言を叩き付ける輩もいた。

あまりの屈辱に小刻みに震え出すルイズ。怒りと悔しさと哀しさで思考が麻痺する。涙で視界が滲む。

胸中に沸き上がる衝動のままに、杖を未だ笑い続けるギーシュに向けようとした瞬間、押し止めるか of 様に彼女の肩に誰か of 手が置

かれた。

「えっ？」

驚いて振り返れば、そこにいたのは先程まで地面に転がっていた筈の才人であった。

「サイト！ 何してるの、解ったでしょう！？
平民じゃ絶対にメイジに勝てないのよ！
いいから寝てなさいよ、バカ！」

「……バカは余計だっつの。ちよっと油断しただけだ」

そう言い返す才人だが、誰が見ても強がりには見えない。

脚は震えて今にも崩れ落ちそうだし、盛んに脂汗が流れる顔色は真っ青。

けれどそんな痛々しい姿であっても尚、彼はルイズに微笑んでみせた。

「……へへっ、ようやく俺を名前で呼んだな、ルイズ」

その言葉に目を白黒させるルイズを押しやり、才人は再びギーシュに対峙した。

「ふむ、もう立ち上がれるのかい？
少々やり過ぎたかと思っていたが、どうやら君は思いの外頑丈らしいな」

そんな才人の姿を見て、ギーシュがそんな人事めいた感想を漏らす。

実際、彼は殆ど手加減していない。これが初めての実戦だった事

もあるし、何より生意気な態度を取る才人に腹が立っていたから。
一方、ルイズもまた混乱していた。あの一撃を、メイジの魔法を受けてなお決闘を続けようとする才人の行動が理解出来なかったから。

「どうして立つのよ、平民がメイジに勝てる訳ないのよ！
今ならまだ間に合うわ、謝りなさ「やだね」……え？」

引き止めるように肩に寄せられた彼女の手を、才人は引き剥がす。
そして彼は顔を正面に向けたまま、ルイズに言い聞かせるように語り出した。

「相手がメイジだろうが貴族だろうが平民だろうが、女の子を泣かせるなんざ男として許せる訳ねえ。ましてやお前まで物笑いの種にしてんだろうが。」

「こんな奴になんで謝らなきゃなんねえんだよ」

それは才人の胸中に沸き上がる怒りの原点。

「シエスタを泣かせたのも、あの二人を泣かせたのも、お前を泣かせたのも全部コイツじゃねえか」

それは先程のルイズの怒りよりも遥かに大きく、熱く、そして高い怒り。

「ムカつくんだよ。魔法が使えるからなんだってんだ」

それは自分の為ではなく、傷つけられた他人の為の、崇高な怒り。
「使い魔にされてもいい。寝床が床でも構わない。洗濯だってして

やるよ。

どの道帰れないんだ、此处で生きる為なら何だってするさ。でも

……」

その言葉に隠された激情に、貴族である筈のルイズが気圧される。

「下げたくない頭は下げらんねえ。

……どいてるルイズ。お前にもコイツの頭下げさせてやるからよ」

勝利の予告と共に、才人は再びワルキューレに踊り掛かった。

それがどんなに固い決意であっても、必ず報いられるとは限らない。

そんな残酷な真実を知った人間の反応は二つ。

諦めるか、それでも構わず挑み続けるか。

才人は後者であった。

（ワルキューレって、確か北欧神話の戦乙女だったっけか？

戦って死んだ勇者の魂を迎えに来るって云う、死神みたいな奴）

成る程、神話に出てくる戦乙女はどうだか知らないが、この青銅のゴーレムは才人にとって間違いなく死神であろう。

才人はそこそこ喧嘩は強い。ただしそれは相手が人間だった場合の話だ。金属製のゴーレムと喧嘩した経験などある筈も無い。

二回目の突撃は顔面に飛んできた拳に防がれた。鼻血を流しながらよろよろと立ち上がり、三回目の突撃を試みる前に再び殴り飛ばされる。

それでも立ち上がる才人に容赦なく拳の洗礼が降り注ぐ。殴られる度に無様に転げ回るものの、それでも才人は立ち上がって見せた。八回目の打撃は、それを防ごうとした右腕を粉碎してくれた。骨が折れる音が才人の中に響き、鈍い痛みが脳に突き刺さる。

一瞬動きが止まった才人の顔面を、ワルキューレの蹴りが踏み抜く。もんどりうって倒れた拍子に頭を地面に打ち付け、意識がかすむ。

その時、何かがポケットから零れ落ちた。

戦闘中、しかも現在進行形で重傷者にされていると云うのに、その感覚だけはやけにはつきりと感じられる。

ばやけた視界で確認する。それは折り畳み式の携帯電話だった。才人がハルケギニアに来てからずっと、肌身離さず持ち歩いていたものだ。

電池はまだ残っているが、基地局も無い此处では無用の長物に過ぎない。

その筈だった。

なんの気なしに携帯を拾い上げる。その瞬間、才人の動きが止まった。

「なんだいそれは、玩具かい？」

……そんなものを持ち込むなんて、何処までも貴族を馬鹿にしているね君は！」

ギ・シュが詰り、それに同調した野次馬達からも罵声が上がる。しかし才人の耳には届かない。いや、正確には『そんなもの』に

耳を貸す余裕がなかったのだ。

左手のルーンが輝き出し、その『使い方』が分かった事に、その『存在』が理解出来た事に混乱していたのだから。

そのルーンに付いて誰も才人に説明しなかった。誰もが、そうルイズですら『平民の使い魔』に氣を取られていたために、そのルーンが誰も見たことの無い珍しい物であつたことに気付かなかったから。

だから才人は知らなかった。

自分の左手に刻まれたルーンが伝説の使い魔『ガンダールヴ』である事も。

自分の能力が『全ての武器を達人の様に使いこなす』と言う事も。自分の携帯が特殊な『プログラム』をインストールされた『武器』であつた事も。

ルイズは激怒していた。

才人をいたぶるギーシュにも、それを止めようとした自分を押しつけた才人にも。

既に才人はボロボロだ。ゴーレムにあれだけ痛めつけられて、最早立っているのがやつとの状態なのに、それでも彼女の言葉を聞き入れてはくれない。それが無性に癪に障る。

（何で謝らないのよ！ このままじゃアンタ殺されちゃうわよ！）

彼女には止められなかった。メイジと平民が戦えばこうなるのは解っているのに、周囲の制止を振り切ってまで決闘に応じ、あんな大怪我を負いながら、それでも頑として頭を下げようとせずに挑み掛かって行く彼を。

（アンタは私の使い魔なのよ……！ 勝手な真似は許さないんだからね……！）

また才人が殴り飛ばされる。嫌な音を立てて才人の右腕があらぬ方向を向く。

折れたのだ。

なのに才人は立ち上がる。鼻はとくに折れ、左目も腫れ上がっていて、満身創痍の有様だと云うのに、諦めずに立ち上がる。

（もう、もうやめて……、それ以上立ちあがっちゃ駄目！ お願いだから……！）

もう見では居られない。強引にでもこの私刑を止めさせようとルイズが一步踏み出したその時、才人のポケットから何かが落ちた。銀色の小さな箱。ルイズの脳裏に聞き慣れない異世界の言葉が蘇る。

（……あれは昨日見せてくれた『携帯電話』？）

あれは確かに驚くべき性能を持っていたが、戦いには何の役にも立たない筈だ。

その筈だ。

だからルイズには分からなかった。

それを拾い上げた才人の左手のルーンが突然輝き出した理由が。
それがこれまでの自分を変える瞬間であつた事が。
それがちつぽけな自分を歴史の激流に投げ出す号砲であつた事が。

ギーシュは才人を本気で殺そうと思つていた訳ではない。

貴族らしく平民への蔑視があるとはいえ、立場を笠に着て無体を働く程悪人ではなかつたし、そんな度胸もない。

二股がばれると云う醜態を取り繕うためにシエスタへ詰め寄つたのも、無意識のうちに『みつともない』自分を誤魔化そうとしただけだ。

そこへ才人が口を出したせいで落とす所をなくしてしまい、更なる恥をかいた事で追いつめられたギーシュはその捌け口を決闘に求めた。

最初は此処までするつもりはなかつた。二、三発痛めつけられずぐ降参するだろうと樂觀していた。

ところが予想に反して才人は降参せず、むしろ反撃しようとしてくる。

これはギーシュの想定外であつた。もちろん貴族と平民の圧倒的な力の差は埋めようがなく、才人は一方的な暴力にさらされ続けている。

それでも才人は諦めない。傍目にも重症だと分かる程ボロボロの姿で、なのにまだ立ち上がろうとしている。

それがギーシュの癪に障つた。

最早彼には『人を殺す』という禁忌に対する恐怖はない。あるのは『生意気な平民を叩きのめす』という傲慢な欲望だけ。

だから彼には分からなかった。

何故倒しても倒しても尚才人が立ち上がってくるのか。

何故才人が銀色の箱を掲げているのか。

何故いま自分の目の前に『ソレ』が現れたのか。

本塔の最上階、トリスティン魔法学院の学院長室にて、部屋の主たるオールド・オスマンと重厚な造りのテーブルを挟み、春の使い魔召喚の儀式を監督していたジャン・コルベールが泡を飛ばしていた。

ルイズが召喚した平民の少年、その左手に刻まれた見慣れないルーン。

持ち前の好奇心を発揮して昨夜から図書室に籠り、教師のみが閲覧出来るフェニアのライブラリーまで漁って行き着いた答え。

自身が発見したそれに仰天したコルベールは、取る物も取り敢えずオスマンに報告をしに来ていたのだ。

「あの少年は始祖ブリミルの使い魔、『ガンダールヴ』です！

これが大事じゃなくて何なんですか、オールド・オスマン！」

禿頭に光る汗を拭いながら捲し立てるコルベールとは対照的に、

オスマンはあくまで冷静な態度を崩さなかった。

「成る程、確かにルーンは同じじゃ。しかしそれだけで決め付けるのは早計じゃて」

「それはそうですが……」

言い淀むコルベール。

そのタイミングを見計らったかの様にドアがノックされる。

学院長の秘書であるミス・ロングビルが緊急の報告を持って来たのだ。

「ヴェストリの広場で決闘をしている生徒がいるようです。

先生方が止めようとしているようですが、生徒に邪魔されて止められないようです」

「……暇を持て余した貴族程性質の悪いもんはおらんわい。で、暴れているのは誰と誰じゃ？」

「一人はギーシュ・ド・グラモン。もう一人は……」

ロングビルの声色に戸惑いが滲む。彼女にしてもこんな事態は初めてだからだ。

「メイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の少年のようです」

予想外の面子に顔を見合わせるオスマンとコルベール。『眠りの鐘』の使用許可を求めるロングビルに「放っておきなさい」と指示して下がらせる。

足早に立ち去って行く足音。それを背に生唾を飲み込んだコルベールが促し、オスマンが杖を振った。すると壁にかかった大きな鏡がヴェストリの広場の様子を映し出す。

『遠見の鏡』と呼ばれるマジックアイテムである。彼らはこれを通して才人が本当に『ガンダールヴ』であるかどうかを判断することにしたのだ。

伝説の使い魔ガンダールヴ。その力は『あらゆる武器を使いこなして、千人の軍隊を一人で壊滅させる』と伝えられている。

あの少年が本当に現代に甦った伝説の使い魔かどうか、この決闘で解るだろう。二人の思惑は概ねそんなものであった。

だから彼等には分からなかった。

才人が拾い上げた小さな箱が何なのかを。

才人が呼び出した『ソレ』の正体を。

才人がハルケギニア史上初めて現れたメイジ以外の奇跡の担い手である事を。

血で汚れた手で携帯を開き、アプリケーションを起動させる。

『DDS - Client - Program ver. 1.89』

『悪魔に乗っ取られぬようお気をつけて』

警告にも似た起動画面が一瞬浮かび、すぐさま切り替わる。

画面に現れるリストメニュー。8つあるスロットのうち、入っていたのは一つだけ。

『妖精 ピクシー L v . 3 ニュートラル／ニュートラル』

カーソルを合わせ、決定ボタンを押す。

「初仕事だ……」

目まぐるしく流れる文字列、それがいつかのパソコンに現れたものと同じである事に気付いた才人が痛みに顔をしかめながら呟く。

「頼むぜ……」

才人が頭上に掲げた携帯に複雑な図形が浮かぶ。
それは間違いなく『魔法陣』であった。

「力を貸してくれ……」

魔法陣が画面を飛び出す様に激しく発光し、そして……

「……俺の『仲魔』！」

悪魔は顕現した！

最初、野次馬達は『ソレ』が何なのか認識出来なかった。
あまりに自分達の常識から外れていた為に。

『ソレ』は少女の姿をしていた。整った容姿にあどけない表情。しかし、人間ではない。

……30 سانت程の身長と背中に蜉蝣の羽根。

それは正に『妖精』であつた。

一瞬の静寂。そして、

「「「「平民が妖精を召喚したああああ！！！！！！」」」」

絶叫。

「へ、平民が『サモンサーヴァント』を使つただと！」

「馬鹿な、そんな訳あるか！」

「じゃ、じゃあアイツはメイジなのか！？」

「だけどアイツ、杖を持ってないぞ！」

「どうやって『サモンサーヴァント』を使つたんだ！？」

「あの箱が光つたぞ！ あれはマジックアイテムなんじゃないか！？」

「そんなアイテム聞いた事ないぞ！」

騒然となる観客達。

少し離れて様子を伺っていたキュルケも突然の事に動揺を隠せない。

いつもの超然とした態度をかなぐり捨て、慌ててルイズの元に駆け寄る。

「る、ルイズ！ 何なのあれ、何が起こっているの？ 彼は一体、何者なの！？」

立て続けに浴びせられる疑問、宿敵たるツエルプストーに詰め寄られているにも拘らず、ルイズは無言。

……否。

ルイズは返答しなかったのではない。出来なかったのだ。

おそらく、この場で一番混乱していたのは誰であろうルイズその人であつたのだから。

（あれは何？ サイトが『サモンサーヴァント』を使った？

……平民が魔法を！？ アイツはわたしに何も言わなかった！

騙していた？ なんで？ どうして？ わたしが使えない魔法を

サイトは……）

疑問、疑惑、苛立ち、怒り、猜疑心、劣等感。

ルイズの思考は巡る。抜け道のない、答えのない問いを幾重にも重ねて。

すぐ傍でかなり立てるキュルケの声すら届かず、彼女の精神は堂々巡りに陥った。

一番混乱していたのがルイズなら、一番焦っていたのは他ならぬギーシュであろう。

なにせ突然、お伽話に出てきそうな妖精が現れたのだ。しかも呼び出したのは決闘相手の平民である。

妖精は物珍しげに周辺を見回していたが、半死人状態の才人に気

付いて近寄った。

才人は銀色の箱を耳に当て、何かを話し掛けているようだ。それが聞こえたのか、妖精は頷くと両手を才人に突き出して叫ぶ。

「ディア！」

柔らかく暖かな光が彼を包み、そして、

「サンキュー、助かったぜ！」

才人は勢い良く立ち上がった！

「な、何い
い
い
い
い
い
い
い
！
？
！
？
！
？」

ギーシュの人生に取ってこれほどの驚愕はそうそうあるまい。
今の今までボロボロだった男が、一瞬で元気を取り戻したのだから。

（み、水魔法の治療か？ いや、秘薬を使ってる様子はなかった！
なら、あの妖精の……先住魔法！！！！！！）

ギーシュの顔色が変わる。

ソレまで興奮の赤に彩られていたのが嘘の様に青く、さらに蒼白へ。

先住魔法。

ここハルケギニアにおいて人類の天敵とされるエルフ達を使う魔法体系である。

エルフのみならず、最悪の妖魔とされる吸血鬼や伝説に詠われる

韻獣も使い、その使い手にはメイジが束になっても敵わないと言われている。

（じ、じゃあ今日の前に浮かんでいる妖精は、エルフに匹敵するという事が！

なら、ソレを呼び出したあの平民は一体！？）

断片化された情報を元に、焦燥と曲解をもって組み立てられた結論にギーシュは自ら追いつめられていた。

光の中から顕現した妖精の姿に才人は驚愕する。
しかしその内容は周囲のそれとは異なっていた。

（おお……、本当に喚べた）

そう、才人は『喚んだもの』に対して驚いているのではなく、『喚び出せたという事実』に対して驚いていたのだ。

手の中にある携帯が『そういうもの』であり、自分が『そういうもの』である事はなんとなく確信していたものの、実際に実行出来ればやっぱり度肝を抜かれる。

妖精……、ピクシーは才人の怪我に驚いたらしい。蜉蝣のような羽根を飛ばたかせ、才人の正面にホバリングする。

同時に携帯が着信音を奏でた。

コール一発。即座に着信ボタンを押して耳に当てる。

「もしもし？」

『ちよつと大丈夫？ もうボロボロじゃない！』

欧州の童話に出てきそうな姿形のくせにイントネーションは日本のギャル風。

そのギャップに苦笑しつつ、才人は携帯を通して彼女に語りかける。

「実はあんまり大丈夫じゃない。だからなんとかして欲しくて喚んだんだけど……」

その前にお願ひがあるんだ」
『お願い？』

見た目重傷者の才人が、自身の危機より優先する事。
ピクシーが頭上に疑問符を貼付けながら続きを促す。

「君の名前は？」

『……は？』

「いやだから、君の名前。ピクシーって俺らで言えば人間とか日本人って呼ぶ様なもんなんだろう？」

『……へ？』

「これから長い付き合いになりそうだしな。俺は平賀才人。才人でもいいよ」

『……ええ！？』

一瞬、ピクシーは本気で混乱した。

死にかけの召喚者の最初の命令、それがよりにもよって自己紹介とは。

完全に悪魔を支配する為に『真の名』を知ろうとする事もあるが、

これは違う。

才人はただ、本当にただピクシーの名前を知りたいだけなのだ！

『……あはっ』

ピクシーが思わず笑う。

『OK、アタシあなたを気に入っちゃった！

アタシの名前は『マリ』だよ！ 今後ともヨロシク！』

「よろしくなマリ、とりあえずこの怪我何とか出来ないか？

そろそろ気が遠くなってきたんだけど……」

『まかせて、回復！』^{ディアア}

柔らかく、暖かな光が才人を包み、消える。そして、

「サンキュー、助かったぜ！」

才人を蝕み続けた痛みが引いて行く。

疲労で鉛のようだった手足が動く。全身が活気に満ちあふれる。

先程までの半死人状態が嘘の様に勢い良く立ち上がり、才人はギリシュに向かってファイティングポーズをとる。

「やろうぜ、第二ラウンドだ」

血の気が引いた顔色のまま、ギーシュが慌てて杖を構えてルーンを紡ぐ。

周りに飛び散った青銅の薔薇の花びらから新たにゴーレムが現れる。

最初の一体と合わせ、その数は7。それぞれの手には今まで無かった剣や槍がある。

才人は知らなかったが、それはギーシュの使える最大数だった。

「な、何なんだソレは！？ 君は一体何者だ！？」

震える声で今まで齒牙にもかけなかった彼の正体を問うてくるギーシュに、

「どうやらデビルサマナーって奴らしい。できたてホヤホヤのな！」

小さな妖精を従えた才人は不敵な笑みと共に応えた。

06 決闘の顛末と残された疑問

その結末に驚いたのは、決闘を見届けた観客だけではない。恐らくはその当事者こそ一番驚いていたのだろうから。

「行け、ワルキューレ！」

ギーシュの命令と共にゴーレム達が踊り掛かる。

「マリ！ 頼んだ！」

OK、任せて！

才人の命令に蜉蝣の羽根を羽ばたかせ、小さな体軀をゴーレム達の正面に運んだピクシーが力強く応える。

「行つけえ！
疾風ザン！」

マリの呪文とも掛け声ともつかない宣言と共に吹き荒れる突風。それは突進してくる一団の先頭、剣を持ったワルキューレを粉々に打ち砕いた。

「な、何だつてええええええええええ！？！？！？」

驚愕するギ―シュ。無理も無い。

（あの妖精は回復だけでなく、攻撃も出来るのか！？）

ギーシュの系統は「土」だ。

確かに一年生の間では彼のゴーレムは高い評価を得ているものの、

未だドットでしかない彼には他の属性を同時に使いこなす事は出来ない。

そして『土』の系統には、攻撃に使える魔法が殆ど存在しないのだ。

攻撃魔法の花形は『火』と『風』。主に治療に使われる『水』でさえ氷や冷氣等のバリエーションがある。こと魔法戦闘に於いて『土』は最弱だろう。

唯一と云って良い例外が、今ギーシュが使っているゴーレムなのである。

しかし『エアハンマー』や『ファイヤーボール』が『魔法で造り出した矢、あるいは爆弾』ならゴーレムは言わば『魔法で造り出した兵士』。

術者と離れた場所で戦える、術者の精神力が続く限り無限に造り出せる等の違いはあれど、戦い方そのものは人間と何ら変わりはない。

攻撃を避けられれば当たらないし、耐久力を遥かに越える衝撃を受ければ壊れてしまう。

精神力に余裕があれば破壊されたゴーレムを直す事も出来るが、ギーシュの精神力は七体のゴーレムを造った事でほぼ使い切っている。

要するにギーシュの戦闘手段はここにある七体のワルキューレのみであり、これを失ってしまえばもう何も出来ないのだ。

（拙い、このままでは僕が不利だ！　ワルキューレを全て失う前に決着を付けないと！）

ギーシュの思考が高速で巡る。残ったゴーレムの運用法、妖精の魔法が届く範囲とその威力、そして今に至る経緯。

そこに思い至った時、彼の脳裏に閃くものがあった。

突拍子も無い事態に惑わされていたが、先程まで才人はろくな反

撃も出来ずにいた。ならば…

（狙うのは……あの平民だ！）

一体を砕かれはしたものの、まだ六体が無傷で残っている。ギーシュは四体のゴーレムで妖精を包囲した。

「ふっ、どんなにその妖精の魔法が強力であっても、四体同時には攻撃出来まい！

ワルキューレ、その妖精を足止めしろ！ その間に…」

ギーシュの目が才人を捉え、

「君を倒せば僕の勝ちだ！」

残った二体のゴーレムが才人に突撃する。

「なっ！ おい、マリ！」

焦る才人が妖精の名を呼ぶが、しかし四体のゴーレムは絶妙な動きで妖精を阻む。

そしてゴーレムの拳が才人に直撃した。

「がっ！！」

スピードの乗った青銅の拳。その威力は容易く才人を吹き飛ばした。

激変する状況に混乱していたルイズが、才人が殴り飛ばされた轟音で我に返る。

見れば今までの焼き直しのようにゴーレムに追い詰められている才人。

先程と違うのは彼に襲いかかるゴーレムが二体が増えていた事と、追い詰めている筈のギーシュに余裕が無い事だろうか。

（ちょっと、何で又やられてんのよ！ あの妖精は……！！？）

あの妖精の姿を探して辺りを見回すと、少し離れて円陣を組むゴーレムが見えた。

その時、突然一体のゴーレムが砕けて崩れ落ちた。しかし即座に他の三体がお互いの距離を詰め、隙間を埋めてしまう。

「……！、あの中に妖精がいるの？ そうか、あの妖精をサイトに近づけさせない気ね！

姑息な真似をするじゃないの！」

気付くが早いか、ゴーレムに杖を向けて『ファイヤーボール』を唱えようとして、

（今、私は何をしようとしたの？）

ルイズは硬直した。

貴族の決闘には様々な作法がある。

挑戦の仕方、戦いの内容、決着の付け方など多岐に渡る決まり事

の中で、絶対に破る事を許されないルールがある。

『一対一の決闘に外野が手を出してはいけない』

この決闘はサイトとギーシュの一騎打ち。

実際にはギーシュがゴーレムを持ち出す事で八対一、才人が妖精を喚び出した事で八対二ではあるが、あくまで決闘しているのはこの二人だ。

ここでルイズが乱入して才人が勝利しても『二人掛かりで決闘を汚した卑怯者』になるだけだ。それは大貴族たるヴァリエールの娘が取るべき行動ではない。

そして同時に浮かび上がる迷い。

訳の解らないホラ話をのたまい、やたら反抗的な上にご主人様の命令を聞かず、あまつさえ先住魔法を使う妖精を従える平民。

ここまでマイナス要素が集まった使い魔は他に居ないだろう。間違はなく歴代の『使い魔召喚の儀式』で一番のハズレに違いない。ならば何らかの理由で使い魔との契約を失えば、再召喚が認められる可能性はあるのではないだろうか。

そう、例えば……使い魔の死、とか。

（サイトがこの決闘で死んだら『コントラクトサーヴァント』が切れ、私は新しい使い魔を喚べるのでは？）

そんな考えが脳裏を掠めるが、

（……何考えてるの！？ 死ねば召喚をやり直せるなんて外道な事を！！！）

頭を激しく振り、ルイズは鎖の様に絡み付く邪念を払う。

思い返すのは先程の才人の言葉。

『下げたくない頭は下げらんねえ。

……どいてるルイズ。お前にもコイツの頭下げさせてやるからよ』

既に重傷だったにも拘らず、敵わない筈の相手に立ち向かう才人。シエスタに謂れの無い因縁を付けたばかりか、彼を庇ったルイズさえ嘲笑ったギーシュを決して許すまいとするその姿。

貴族として『敵に後ろを見せない』事を信条とするルイズにとってさえ、それは尊いものに見えたのだから。

だからこそ止められなかった。だからこそ助けようとした。

彼を見殺しにするなんてあり得ない！

今度こそこの決闘を止めようとして、ルイズはそれを見つけた。

蹲る才人の背後、先程妖精の先住魔法に砕かれたゴーレムが持っていた得物に。

気付けば彼女は大声を張り上げていた。

「サイトおおおつ！ 武器よ、貴方の後ろに剣があるわ！」

再び顔を殴られ、朦朧とする意識の中で才人はその声を聞いた。

「サイトおおおつ！ 武器よ、貴方の後ろに剣があるわ！」

（……あの声はルイズか？ 武器って……これか！）

反射的に背後を探り、手に触れたそれを握る。
その瞬間、顔の痛みが消えた。

身体が異様に軽い。まるで羽のように思える。

剣を握る左手に目をやると、あの使い魔のルーンが光っているのが見えた。

「ふん、武器か！ 平民どもがせめてメイジに一矢報いようと磨いた牙だが、そんなものが今更通じるとでも思っているのかね！？」

剣を手にする才人に冷笑を浮かべたギーシュが造花の薔薇を振り、二体のゴーレムに命令を下す。

それに応えて二体同時に突進するワルクューレ、腰だめに構えた槍と固めた拳が風を切って才人に迫る。

そして、その動きを才人はスローモーション映像の様に捉えていた。

（何だ……？ コイツ、こんなにトロかったか……？）

正面から殴り掛かってくる一体を躲し、その脇から突き出された槍を跳んで避ける。

そのままゴーレムの背後を取り、思いっきり体当たりをぶちかます。

バランスを崩されてたたらを踏むゴーレムを、左手の剣で思い切り斬り付ける。

僅かな手応え。例えるなら豆腐でも切った程度の感触を残し、青銅製のゴーレムは真つ二つになった。

「「え？」」

ギーシュと才人が同時に声を上げる。

ギーシュは『ゴーレムが容易く斬り裂かれた』という嘘の様な結果を見て。

才人は『武器を達人のように使いこなした』という冗談の様な結果を見て。

それぞれ方向性は違えども、あり得ない結果を見た驚愕を極短い感想として漏らしたのだった。

それは当然ルイズや観客達にも見えていた。

剣を手にした才人がゴーレムの背後を取り、剣を振るってゴーレムを斬り裂いた。

言葉にして並べればただそれだけ。だが、それを視認出来たのはごく一部の生徒のみ。

速かったのだ、才人の動きが。

突き出される槍を躲しながら旋風の様に回り込み、振る剣が見えない程の高速で斬り付ける。

時間にして数秒。一切の無駄の無い、完璧な剣技。

一瞬の静寂の後、悲鳴じみた怒号がヴェストリの広場を揺るがした。

「すげえ、何だあの速さ！？ 剣が見えなかったぞ！」

「見るよあのゴーレムを、青銅とはいえ立派な金属だぜ！？ それを簡単に真つ二つにしちまった！」

「何なんだあの平民！ あんなに強いんなら最初っから剣で戦えば良かったのに！」

「何者だアイツ！？ ヴァリエールは一体何を使い魔にしたんだよ

！？」

野次馬達のざわめきはルイズにも聞こえている。
但し、その内容は彼女の頭には届かなかった。

（アイツ、あんなに強かったの！？）

啞然とする。一方的に殴られ放しだった男と同一人物とは思えない剣技を見せられて、ルイズの混乱はますます深まるばかりだ。
ふと、先程まで詰め寄っていたキュルケの姿が見えない事に気付くが、そんな些細な事はすぐ意識の外に追いやられる。
才人がワルキューレに突進したのが見えたからだ。

才人は自身に起きた異変を完全に把握した訳ではない。
だが、今だけはこの現象に感謝していた。

（なんだか解らねえが、とにかくコイツをぶちのめすには丁度良い！）

残ったゴーレムは四体。そのうち三体は妖精のマリに向かったまま、無防備に背中を曝している。

その背中へ向け、才人は剣を振りかぶる。
その狙いに気付いたギーシュが慌ててゴーレムを操り、妖精の包囲を解いて才人に向き直させるが後の祭り。

瞬く間に二体のゴーレムがバラバラに切り刻まれ、残った一体が彼に拳を振り上げようとして背後から飛んで来た疾風に碎かれる。

残った戦力はゴーレム一体のみ、対する才人は妖精の援護を取り戻して万全の状態。

どう考えてもギーシュは既に詰んでいる。

それでも咄嗟に残ったゴーレムを眼前に置き、盾にしながらギシュは現状を覆そうとしていた。

（くっ！ 何なんだあの平民は！

妖精を従える上に凄腕の剣士だなんて聞いていないぞ！？）

内心で齒噛みしながら逆転の一手を考える。

（既に魔法は打ち止めた。残ったワルキューレは一体だけ。しかも妖精はおるかあの平民にさえ齒が立たない！

こんなに追い詰められるなんて初めてだ。何かいい方法は無いか、いい方法は……）

必死に打開策を模索するが、何より前提条件が厳しすぎる。

自分より強い相手が二人掛かりで襲ってくるのだから、当然だが。

（……ん？ 妖精と二人掛かり、だと？）

脳裏に引っ掛かるキーワード。

（最初、あの平民はワルキューレに一方的に殴られていた。何故だ？ あんなに強いのなら最初から勝てた筈だ。どうして最初から反撃に出てこなかった？）

そう、才人が逆襲に転じたのは散々痛めつけられてからだ。

（思い出せ！ 何時から立場が逆転した？ あの時と一体何が違う？）

あの時、妖精を喚び出す直前まで才人はワルキューレの拳を避ける事が出来なかった。

（そうだ、その時に僕は彼になんて言った？ 確か……）

『なんだいそれは、玩具かい？』

……そんなものを持ち込むなんて、何処までも貴族を馬鹿にしているね君は！』

何度目かの打撃の時に、彼がポケットから落ちた銀色の何かを拾い上げたのを見て言い放った言葉。

『ふん、武器か！ 平民どもがせめてメイジに一矢報いようと磨いた牙だが、そんなものが今更通じるとでも思っているのかね！？』

妖精の援護を無くした彼が剣を取ったのを見た時に言い放った言葉。

いずれも才人が豹変する直前の事だ。まるで別人のようになる前の……。

「そつか、解ったぞ！」

言っが早いか薔薇の造花を振るギーシュ。

新しい魔法は打ち止めでも、既に掛かっている魔法を解く事は出来る。

先程造ったゴーレムの得物を消す事位は。

「なっ、何だ！？ 剣が崩れてく！？」

驚愕する才人。左手に握っていた剣が突然塵の様に崩れ出したの

だ。

途端に身体が重くなる。忘れていた痛みがぶり返す。腕が、脚が、体全体が途轍もなく重い。凄まじい疲労感に襲われて、才人は倒れた。

「ふふつ、思った通りだ。いや、予想以上と言っべきかな？」

無様に倒れた才人を見下し、余裕を取り戻したギーシュが笑う。

「理由は解らないが、君は何かしらの道具が無いと戦えないんだろ
う？」

剣を取る前と後では君はまるで別人のようだったからね。

あの妖精が君を回復させたときも、君はその道具を通して命令していたようだからな、まず間違いあるまい。

ならば、その道具を取り上げれば君は無力な平民に逆戻りという
訳だ！」

それがギーシュが見つけた、未だ才人自身も知らない秘密。

才人の左手に刻まれた『ガンダールヴ』のルーンは、あらゆる武器を使いこなす身体能力をもたらす効果がある。

だからこそ携帯にインストールされたプログラムの使い方を知る事が出来たのだし、持った事の無い剣を達人の如く扱えたのだ。

逆に言えば、武器を持たない才人は只の一般人にしか過ぎないのである。

「く、くそっ！ マリ！」

ガクガク震える腕を倒れた拍子に手放してしまった携帯に伸ばす。その腕を、青銅の脚が踏みつけた。

「妖精に助けを求めるつもりかい？ させる訳無いだろう！」

冷たく笑うギーシュがその腕を振り上げ、連動してゴーレムも槍を振りかぶる。

追い詰められた彼の精神は、冷静な思考を麻痺させていた。普段なら絶対にあり得ない選択を選ばせる程に。

「散々梃子摺らせてくれたが、これで終わりだ！ 死ね、平民！」

殺人の禁忌も、貴族の責務も忘れてしまったギーシュの死刑宣告と同時にその腕が振り下ろされた。

ギーシュが見抜いた才人の秘密は、それを見ていた野次馬達には伝わらなかった。

あれ程恐ろしい強さを見せた才人が、剣を失った瞬間に崩れ落ちる様に倒れたのを見るや、観客達が歓声を上げたからである。

「何だアイツ！？ 急に倒れたぞ！？」

「やっぱり今までやせ我慢してたんだ！本当は限界だったんだぜ、きつと！」

「平民如きが貴族に楯突くなんて、始祖ブリミルがお許しになる訳無いだろ！」

「天罰って奴さ！」

口々に好き勝手な憶測を述べ、地面に転がる才人を罵る野次馬達。だがゴーレムが才人を踏みつけ、槍を振りかぶるのを見るや一斉に口を閉ざす。

確かに貴族には無礼打ちの権利がある。しかし実際に行使される事は稀だ。

大抵の平民はその辺りをわきまえており、貴族に楯突くなど有り得無いのだから。

その禁忌をギーシュは破ろうとしている。

確かに相手は得体の知れない平民だ。先住魔法を使う妖精を従え、凄まじい剣技を持ち、貴族に反抗的な態度を取る。

これだけ揃えば無礼打ちも仕方が無いが、本当に殺すなんてやり過ぎではないか？ そんな思いが全員の心をよぎったのだ。

それでも誰もギーシュを止めようとしない。平民を助けようとは誰も思わない。

ただ一人を除いて。

「やめてギーシュ！ 誰か！ サイトを、サイトを助けて！」

野次馬達に取り押さえられたルイズがもがく。ギーシュに向かい杖を振り上げた所を止められたのだ。

彼女は後悔していた。この決闘を止めなかった事を、才人を死地へ送ってしまった事を、彼を助けられない事を。

いつもの強がった態度はもう何処にも無い。涙でぐちゃぐちゃになっても尚可憐な美貌にあるのは嘆きの色だけ。

そしてギーシュの手が振り下ろされるのを見たルイズは絶叫した。

「イヤああああああああああッ！！！！！！！！」

ギーシュは混乱していた。

（馬鹿な！ 僕は確かにあの平民を殺した筈だ。なのに、何で奴は生きている！？）

ゴーレムの槍は確かに振り下ろされた。地面に突き立っている槍がその証拠だ。

しかしその場所が問題だった。

槍は才人の頬を翳め、誰もいない地面に突き刺さっていたのである。

（何故だ、あの距離で狙いを外す訳が無い！ 奴は動けないから躲ける筈が無い！

誰も奴を助けなかったんだから、助かる筈が……！）

自問自答を繰り返すギーシュ。

いや、答えは判っている。それでも彼が取り乱したのは、目の前で起きたあり得ない筈の出来事を思考が受け付けなかった所為だった。

（あの道具が無ければ、あの妖精は動けない筈だった！

命令も無いのに奴を庇うなんてあり得ないんだ！）

そう、才人に槍が振り下ろされる寸前に、妖精のマリがゴーレムに体当たりを入れて槍の軌道を逸らしたのである。

勝利を確信していたが故に、その確信を外された衝撃は大きかつ

た。ゴーレムの制御を忘れ、才人を踏みつける力を弱める程に。時間にして僅かな隙。だがそれはこの場に置いて致命的な油断であつた。

「でりゃあああ！」

腕の拘束を振りほどく才人の気合いの声にギーシュが我に返る。その時には既に携帯は才人の掌中にあつた。

「サンキュー、マリ！ 助かったぜ！」

『どういたしまして！』

携帯を手にすると同時に軽くなった身体を起こし、立ち上がった才人がマリに指示を出す。

「あの人形をぶっ壊しちまえ、マリ！」

『サイトのお願ひなら仕方無いね！ 疾風^{ザン}！』

ギーシュに残された最後の戦力が音を立てて崩れ落ちる。それと共に残っていたプライドが崩れ去つた音を彼は確かに聞いた。

「あは、あははは、あはははははは………」

唐突に笑い出すギーシュ。勝手に口を吐いて出てくる空虚な笑い声が、静まり返つた広場に響き渡つた。

彼にはもう戦う術が残っていない。そして目の前の平民にはゴーレムを一撃で砕く先住魔法を使う妖精が従っている。

ギーシュが無慈悲に殺そうとした平民が、彼を殺せる手段を持つて目の前に立つ。

しかもこの平民には身分の差が通じない。貴族を殺せば確実に死罪だろうが、そんな理屈が解るなら最初から決闘に応じる訳が無い。逆転に次ぐ逆転の果てに、ギーシュは遂に敗北したのだ。

敗北者を裁くのは勝者の特権。ならばこの平民が下す判決は最早決まっている。

跪いて頂垂れるギーシュの前に、ゆっくり歩み寄った才人が仁王立ちする。

「続けんのか？」

彼の問いに力なく首を横に振るギーシュ。最早喋る気力さえ残っていない。

「俺の勝ちで良いのか？」

重ねて問う才人。ギーシュは首を縦に振った。

「そうか、そんなら俺の言う事を聞いてもらうぞ、いいな？」

いよいよか。ああ、短い人生だったなあ。

ギーシュの脳裏に走馬灯が走る。モンモランシーに香水を貰った事、ケティと遠乗りした事、様々な女性と愛を語った記憶が色鮮やかに甦る。

死を目前にして、彼の心は不気味な程静かであった。

そして観衆が固唾を呑んで見守る中、厳かに才人が判決文を読み上げる。

「シエスタに、あのメイドさんに『悪かった』って謝って来い。ルイズにもだ。誠心誠意、心を込めて謝って来い。そしたら許してやる」

ルイズは混乱していた。

最後の一瞬、あの妖精の助けがもう少し遅かったら、才人は確実に死んでいた。

そこまでされておきながら、彼が出した判決は『メイドと自分に謝れ』だけ。

もし自分だったらギーシュを許せるだろうか？ それは絶対にあり得ない。散々侮辱された上、檻褻切れの様にされて尚寛容になれる筈が無い。

混乱し過ぎて何も考えられないルイズを他所に、才人が脇でホバリングしている妖精に何事かを命じる。

妖精は大きく頷き、彼に向かって回復魔法を掛けた。

『ディア
回復！』

見る間に彼の顔色が良くなって行く。やはりかなりの重症だったに違いない。

才人がまた妖精に何かを命じる。妖精が驚いて何事かを言い返す。しかし才人は片手を顔の前に立てて何やらお辞儀している。

どうやら相当に無茶な命令でもしたらしい。妖精が畳み掛ける様に捲し立てているが、その言葉はルイズ達には解らない。

やがて妖精が呆れた様に首を振りながらギーシュの元へ向かい、魔法を掛ける。

すると蒼白だったギーシュの顔色がみるみる内に戻って行く。そ

れは間違いなくあの回復魔法の効果であった。

「……………何で？」

気が付けば、ルイズは小走りに才人の元へ向かっていた。

観客達は混乱していた。

平民が貴族に勝利しただけでも前代未聞なのに、その上敗者であるギーシュを癒す才人の行動が理解出来なかったからだ。

この決闘で怪我をしたのは才人だけ。

ギーシュはゴーレムに指令を出すだけだったので全くの無傷。

にも拘らずギーシュを回復したのには理由がある。

才人が告げた判決を聞くなり、ギーシュが惚けた様に固まってしまったからだ。

「おーい？ ……なあマリ、本当に大丈夫なのかコイツ？ 全然戻って来ないぞ」

『それは当たり前だと思うけど。むしろサイトの方こそ大丈夫？ って聞きたい位よ』

マリの呆れ声に首を捻る才人。

元々彼はギーシュをシエスタへ謝罪させる為に決闘を受けた。

だからこの要求は当然のものとは思っておらず、周囲に流れる微妙な空気が自分の所為とは露程も思っていないのだ。

「……まあいいや。俺はもう行くけどちゃんと謝つとけよ？
あ、二股掛けてた女の子達にもな。後で確認するから、すっぱか
すなよ？　じゃあな」

そう言つて才人はギーシュに背を向け、歩み寄ってくるルイズの
姿に気が付いた。

「おい、勝つたぞ。約束通りコイツに頭下げさせるから……って、
痛てて！

どうしたんだよオイ！？　コラ、引つ張るなつて！」

無言のまま才人の手を取り、そのまま引き摺る様にして自室に向
かうルイズ。

突然の事になすがままに引き摺られる才人。慌てて後を追うマリ。
後に残されるのは決闘の敗者であるギーシュと、急展開の連続に
付いて行けなかった野次馬達、そして何とも言えない空気のみ。

ぼつりと一人の野次馬が漏らした台詞が、その場に居る全員の内
心を代弁していた。

「……彼は一体、何者なんだ？」

06 決闘の顛末と残された疑問（後書き）

とりあえずはここまで。

こちらは原作一巻分で終了予定です。

冒険者の方を優先したいので、こちらは本当に気まぐれで更新され
ると思いますので、予めご了承くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8128z/>

偽典・女神転生 セ?口のテ?ヒ?ルサマナー

2011年12月25日22時50分発行